表紙, 目次, 抄録, 雑報, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38003

金澤醫學專門學校 十全會雜誌

第二十二卷
第四號
（第五十三百號）

大正六年四月一日發行

金澤醫學專門學校十全會

金澤醫學專門學校 十全會雜誌（第二十二卷第四號 第百三十五號）目次

○原著

○淋巴性白血病ト縱膈竇腫瘍ニ就テ……佐々木茂雄 柴田周吉……一
○幻覺及精神朧朦狀態ノ頻發スル小兒「ひすてりー」ニ就テ……佐伯義久……一五
○職工階級ニ於ケル花柳病蔓延ノ狀態ニ就テ……木村豐三郎……二七
○先天性橫膈膜一部欠損附假性橫膈膜「ヘルニア」……松田茂……四一

○學會

○尿「インデカン」ノ新證明法ニ就テ……竹內慶次郎……四五
○新案孵卵器用安全「ランプ」ノ「デモンストラチオーン」……醫學博士 須藤憲三……四八

○抄錄

內科學……五件……四九
小兒科學……五件……五三
神經科學……五件……五五
醫化學……五件……六一
病理學……五件……六六
細菌學……八件……七〇
眼科學……四件……七六
外科學……四件……八一
皮膚科及泌尿器科學……三件……八四
婦人科及產科學……三件……八七

○漫錄

印度見聞記……（其一）……川久保俊一……八九

○雜報

●天然痘豫防訓示。●本年痘病患者數。●英本國及其領土ニ於ケル本邦醫師開業資格。●露國ト本邦醫開業問題。●文部海外留學生。●學校衛生官制改正。●牛乳ノ脂肪率統一。●金澤市醫師會定期總會。……九二

○校內消息

●前學年試驗。●大正六年三月入學選拔試驗。●大正六年三月入學試驗委員。●陸海軍衛生部依託生。●金澤醫學專門學校危險藥品取扱規程。●金澤醫學專門學校非常心得。……九四

○通信

●八川修一郎氏。●關嘉一氏。●鈴木外男氏。●大西清治氏。●八島脩氏。……九六

○叙任及辭令

●內閣。●文部省。●石川縣。……九九

○人事

●石坂博士。●矢吹清氏。●林戶正之助氏。●川久保俊一氏。●八島脩氏。●竹重信次氏。●高桑勇次郎氏。●藏光教授。●大井逸雄氏。●永山昇一氏。●教授及金澤病院醫員諸氏ノ各學會列席。●今井亥三松氏。●牛塚榮大郎氏。……九九

○會告

●本校記念館設備品寄贈芳名。……100

抄　錄

內科學

○肺結核ト外傷ノ關係ニ就テ

實驗例及動物試驗

(Zeitschrift für Exper. Path. u Therapie Bd. 17. Heft. 2. 1915.)

アルツール、マイヤー

外傷ニ因スル肺結核ノ例ハ多數アルガ、外傷前ノ狀態ガ確ニ知レテ居ナイ、著者ハ確實ニ結核ヲ有セザリシモノガ外傷後數週ニシテ肺結核ヲ誘起シタル五例ヲ報告セリ、其ノ外傷ヲ胸部ノミナラズ腹部、又ハ脚部等直接肺ニ關係ナキ部位ニ受ケ、後肺結核トナリシアリ、即外傷ハ直接肺ニ損傷ヲ與ヘ、肺ヲシテ結核菌播殖ニ好都合ナル培養場トナスガ爲メニ非ズ、身体ノ如何ナル部位タルヲ問ハズ、外傷ヲ受クル時ハ其ノ傳染ニ對スル抵抗力ニ減少ヲ來スガ爲ナルコト、飢餓、感冒、疲勞等ト同ジ。

之ヲ動物試驗ニ就テ見ルニ亦同ジ、即肺ニ人工的損傷ヲ與フルモ其ノ動物ノ結核病竈ヲ肺ニ於テ著シク增惡セシムル能ハズ、又「ツベルクリン」ニ對スル抵抗力ヲ試驗スルニ外傷ヲ受ケタル動物ハ著シク抵抗力弱シ、「オプソニン」ニ對スル關係モ恐ラク如是ナラン。要之、外傷ハ肺結核ノ發生ニ對シ局部的意味アルモノニ非ズシテ、身体ノ傳染ニ對スル抵抗力ヲ減弱セシムルガ爲メナリ。

(內科教室田村抄)

○「腸チブス」ノ「バクチン」療法特ニ

フォルネット氏バクチン」ニ就テ

(Zt. f. Exp. Path. u. Ther.Bd. 17. Heft. 2. 1915.)

アルブレヒト、メルツ

「バクチン」ノ豫防接種ハ非常ノ多數デアルカラ、其効果ニ就テ統計上觀察スル事モ出來ルガ、治療上ニ使用サルル「バクチン」ハ今日尙豫防接種程ノ數ニ上ツテ居ナイ、ペトロ―ウッチ氏ガ四百六十人ノ腸「チブス」ニライト氏「バクチン」ヲ使用シ注射セザル者十二・八%ノ死亡率ニ對シ注射シタルモノ僅ニ二・九%ナリシヲ報告シ、亞米利加ニ於テハ菌携帶者ニ「バクチン」注射ヲナシ好成績ナリシ報告アル位ナリ、著者ハ十四人ノ腸「チブス」患者ニフォルネット氏「バクチン」ヲ使用シタリ。

十四例中可ナリ重症ナリシ三人ハ注射後二日―四日ニシ

テ下熱シ自覺症ハ著シク良好トナリ、頓挫性ニ治癒ノ轉機ヲ與ヘタリ、他ノ三例ハ三日—五日ニ幾分下熱セシモ、前三例ノ如ク頓挫性ナラズシテ漸次ニ下降セリ、他ノ八例ニ於テハ熱型ニ對シ影響ナカリシモ凡テ自覺症ハ著シク良好トナレリ、注射部位ニ疼痛アリシハ只一例ノミ、虛脫症狀ヲ呈シタルハ二例アリ、要之、僅々十四例ノ實驗ニテ其効果ヲ云々スルヲ得ザレ𪜈、其ノ自覺症ニ對シ著シキ良結果アルモノナルコトハ疑ヒナシ、「バクチン」注射ハ其結果トシテ溶菌作用ヲ增スト同時ニ、菌毒素ヲ分解スル作用ノ增大ヲ示スモノナラン。

フォルネット氏「バクチン」トハ「チブス」菌ヲ〇・五%「ペプトン」含有ノランゲンドルブ鹽溶液ニ二十四時間成長セシメ、後四五日間低溫度ニテ濾膜分析ヲ爲シ副作用强キ「ペプトン」ヲ除去シタルモノナリ、之レニ〇・五%ニ石炭酸ヲ加ヘ、一・〇cc.中五千万ノ菌ヲ含有セリ、初メハ〇・五、次ノ日ハ一・〇、三日目ハ一・五cc.ヲ皮下ニ注射スルモノナリ。（內科教室田村抄）

○滲出液、尿及淋巴腺等ニ就テ腫瘍細胞ノ證明法

（Zt. f. kl. Med. Bd. 82. H. 3-4. 1916.）

ア—ノルド、ヨセフゾン

滲出液尿ノ外胃液喀痰中ニ存スル腫瘍細胞ヲ確實ニ發見スル事ハ診斷上必要ナル事柄ナリ、著者ハ之レ等ヲ遠心器ニテ沈渣ヲ取リ、無水「アルコール」ニ入レ、彼「バラフヒン」ニ包埋シ切片トシテ顯微鏡檢査ヲ行フヲ推奬セリ、遠心器ニ懸クル能ハザル物質ニハ直接「アルコール」ヲ加ヘ、凝固シタル蛋白質ヲ「バラフヒン」ニ包埋ス、淋巴腺ノ如キハ注射器ニテ吸引シテ得タル僅少ノ液ヲ食鹽水ニテ洗出シ、遠心器ニテ沈渣ヲ取ルモノトス、之ノ法ニヨリ著者ハ數例ノ實驗例ヲ上ゲ各々腫瘍細胞ヲ簡單ニ發見セリ、就中、胃癌ノ轉位アル淋巴腺ニ就テ之ヲ證明シ其ノ診斷ヲ確實ニスルヲ得タリト云フ。（內科教室田村抄）

○「モルモット」皮內反應ニヨル流血中ノ結核菌證明ニ就テ

（東京醫學會雜誌三十一ノ三）

醫學士　石原房雄
同　田中正通
同　清瀧丑之助

從來結核患者ノ循環血液內ノ結核菌ノ出現ニ關シテ多數ノ業績アレ𪜈其ノ成績一致セザル所ナリ、著者等ハ七十五例ノ種々ナル時期ノ結核患者ニ就テ、直接血液標本ヲ

製シタルモノト、血液ヲ「モルモット」ニ注射シ、一定時日後該「モルモット」ニレーメル氏ノ皮内反應ヲ試ミ其ノ成績ヲ比較サレタリ、血液標本製法トシテハ、血液ヲ直ニ三%ノ醋酸液中ニ投ジ充分振盪シ、遠心器ニテ沈澱セシメ、尚沈澱物ヲ三回水洗沈澱シ殘滓ニ二%「アンチフォルミン」液一〇cc.ヲ加ヘ溶解セシム後再ビ遠心器ニテ沈澱セシメ、尚二回蒸餾水ニテ洗滌、沈澱セシム、殘渣ヲ取リ卵白液ノ一滴ヲ滴下シ白金線ニテ混和シ、「オブエクトグラス」上ニ流出セシム、空氣中ニ乾燥セシメテ、「メチールアルコール」ニテ固定シ之ヲ六〇度ニテチール氏液ニ正密ニ一分間浸シ鹽酸アルコールニテ脫色スルモノナリ。又皮内反應ハ二〇〇瓦内外ノ「モルモット」ヲ取リ患者ノ血液ヲ注射セシ後二週ー三週ニ一回ヅヽ檢スルモノニシテ舊「ツベルクリン」五倍稀釋液〇・一ヲ皮内ニ注射シ廿四ー四十八時間内ニ於テ皮膚ノ厚サ著明トナリ、腫脹ノ直徑十五六mm.ニ達スルモノヲ陽性トシ、通常三日ー五日ノ後ニ非ザレバ全ク消失セザルモノナリ、然シテ結論トシテ注意スベキ点ハ結核菌ノ染色標本ニ於テ普通油浸裝置ノ外、最强ナル人工光源「ネルンストランプ」又ハ大型「ガスランプ」ノ如キヲ用ヒ、强キ擴大ヲ使用セバ類似菌トノ鑑別ニ便ナリト云ヘリ、尚動物試驗ト標本檢鏡ハ一致セザル事アルモ、之レ菌体ハ患者血清中ニテ自カラ感作サレ、同時ニ毒力モ減少サレタル結果動物試驗陰性ニナルニ非ラザルカト云ヘリ、其ノ成績ヲ見ルニ七十五例中陽性二十三例即チ三〇・六%ニシテ第一期二六・%、第二期四・二八%、第三期五〇・%ナリ。

染色標本ト動物試驗一致セシモノ　八十六%
同　一致セザルモノ　十四%
内　血液染色　＋　九・%
動物試驗　－
血液染色　－　五・%
動物試驗　＋

以上ノ外甚ダ趣味アル点トシテ擧ゲラレタルモノハ皮内反應陰性ナルモノニシテ後剖檢セシニ結核病竈アリシモノアリ又逆ニ皮内反應陽性ナリシニ剖檢上一定ノ結核病變ナカリシモノノアリシ事實ナリ、菌ノ毒力弱キ時ハ結節中巨大細胞ヲ見ザルアリ、脾臟ノ肥大モ極メテ微弱ナルアリト云フ、又血液中菌ハ發熱及惡寒ト直接ノ關係ナク、高熱重症ナル時ニ血行中多數ノ菌ヲ見ルト云フ。

（内科教室田村抄）

○頭痛ニ就テ

（日本鐵道醫協會雜誌第三卷第二號）

神戸鐵道病院 醫學士 諫山 直

著者ハ解剖學上ヨリ論述シ頭痛即チ頭蓋內部ニ感ズル疼痛ハ主トシテ三叉神經ノ硬腦膜枝ノ刺戟ニ依リテ惹起サルヽモノニテ同神經ニ興奮的ニ働ク刺戟ノ原因ハ主トシテ物理的及化學的刺戟ナルモ又反射作用ニヨル刺戟知覺神經ガ附近ニ及ボス刺戟傳達ニ因スルモノヲモ加ヘ頭內ノ器械的刺戟ヲ首位ニ置キ頭蓋內血液循環障碍ヨリ成ル即チ血管神經性頭痛、腦髓ノ靜脈性充血ヨリ來ル習慣性頭痛動脈硬變ヨリ來ル同性頭痛等ヲ擧ゲ化學的刺戟ニハ無機有機ノ毒物及毒素中毒ヨリ成ルモノ等ニ就テ分類ヲ試ミ最後ニ頭痛ヲ招來スルニハ主トシテ神經衰弱「ヒステリー」及ビ「ヒポコンデリー」等ノ基礎アリテ發スルモノ最多ナルヲ說キ一例頑固ナル神經衰弱性頭痛患者ニ就テ報告セリ。（內科教室時國抄）

小兒科學

○水癌及其細菌學的研究

（成醫會月報第四百貳拾號）

慈專醫學士 御手洗信夫

著者ハ慈惠會醫院外科部ニ於テ二名ノ水癌患者ニ遭遇シ親シク其ノ臨床的經過及動物試驗、其ノ他細菌學的觀察ヲナシ從來ノ文獻ニ徵シ次ノ如ク結論セリ。

一、年齡。水癌ハ四歲乃至七歲ニ多發ス（一四%）

二、性。兩性ニハ著シキ關係ナキガ如キモ女子ヨリ罹患數多シ男四七·四%。女五二·六%

三、誘因即先發疾病。本病ハ痲疹（三三·九%）、窒扶斯（一八·八%）百日咳（七·五%）ノ經過中或ハソノ恢復期ニ發スルモノ多シ、

四、發生部位。水癌ハ頰粘膜（三八%）、齒齦（二六%）ニ多發ス、

五、經過。本病ノ經過ハ五日乃至十五日ヲ最多シトス（二三·一%）

六、轉歸。本病患者ノ死亡率ハ五四·五%ナリ、

七、病原。第一例患者ノ病的組織中ニ於テハ多數ノ肺

炎球菌樣双球菌及桿菌ヲ認メ第二例患者ニテハ其ノ塗沫標本ヨリレフレル氏液及グラム氏法ニ陽性ナル多數ノ肺炎球菌樣双球菌、他ノ球菌、少數ノ桿菌、ワンサン氏菌及「スピロヘーテ、デンチゥム」、「スピロヘーテ、ブッカーリス」ヲ認メ更ニ人工培養ヨリハ肺炎球菌樣双球菌ヲ證明セリ、之レヲ要スルニ兩者ヲ通ジテ共有スルハ肺炎球菌樣双球菌ナリ又動物試驗ニ於ケル潰瘍ヨリモ之レヲ發見セリ且ツソノ動物試驗ニ於テハ第九日目ニハ治療ノ傾向ヲ有シタルモ一時ハ進行性壞疽ノ狀ヲ呈シタリ是等ノ点ヨリ見レバ少クトモ本菌ハ本病發生ニ重要ナル關係ヲ有スルモノト云フモ過言ニ非ズト說ケリ。（小兒科教室川久保抄）

○朝鮮婦人ノ行事

（兒童研究第二十卷第八號）

京城女子高等普通學校　太田秀穗

一、婦人出產スレバ門ニ黃土ヲ敷キ生兒男ナレバ弄璋ノ慶ト稱シ、軒ニ唐辛ヲ吊シ、女ナレバ松ノ枝ヲ挿シテ美風ノ慶ト稱ス、斯クシテ三週間ハ他人ノ出入ヲ禁ズル風アリ後產ハ淸淨ノ地ヲ選ビテ埋メタリシモ、近來ハ大抵當日內門前ニ於テ燒棄ソルナリ。

一、生兒ニ湯ヲ使ハシメタル後ニ靈妙ト甘草トノ水ヲ飲マセ、又朱砂トテ藥ヲ頭ニツクル風アリ。

一、乳ハ生後一晝夜ハ、之ヲ飲マシメズ、又三日迄ハ母乳ヲモ飲マシメズシテ他人ノ乳ヲ飲マシムルナリ。

一、三日、七日、三七日、百日ノ事。　三日ニハ產婦ハ艾ヲ煎ジタル湯ニ入リ小兒ニハ湯ヲ使ハシメタル後著物ヲ著換エサスルナリ。七日ニハ小兒湯ヲ使ヒタル後上下ノ揃ヒタル衣服ヲ著セシム。三七日ヨリ知人祝儀ニ來ル產婦モ初メテ外出ヲ許サルヽナリ。

一、誕生日。　初メノ誕生日ニハ、親戚ヲ招待シテ、祝儀ヲ擧グルナリ、先足高キ大盆ニ白米ヲ盛リ男兒ニハ其ノ上ニ千字文、紙、筆、弓、矢、錢、絲、果物、餅等ヲ飾リ、女兒ニハ別ニ（弓ヲ除ク）裁縫用具ヲ加ヘテ小兒ノ前ニ持チ出ヅ此ノ時小兒ノ最モ初メニ手ニ執リシモノニヨリテ、小兒一生ノ吉兆ヲ判斷スルナリ。即チ小兒筆ヲトレバ名筆家トナルトシ、絲ヲ執レバ、壽命長キ前兆トス。斯クテコノ儀終レバ祝膳ヲ近隣ニ配附ス答禮ハ百日ノ時ト同ジ。

一、就學及ビ內外法。　男兒七歲ニ達スレバ、千字文ヲ授ケ女子ニハ諺文ヲ敎ヘ且ツ專ラ家庭ニテ行儀作法ノ躾ヲナス、現今ハ女子モ男子ト共ニ外出スルモノ追々

多クナリ又普通學校ニ入學スルモノモ次第ニ增加シツツアリ。

一、處容直星。　男兒十歲トナリ、女子十一歲トナレバ、厄年ニ當ルトナシテ藁人形ヲ造リテ、厄ヲ拂フコト正月十四日ノ厄拂ト同ジクス。是ヨリ十年目毎ニ厄年ハ廻リ來ルナリ。斯クテ男女六十四歲ニ達スレバ厄免ルルモノトセリ。（小兒科教室川久保抄）

○重症小兒腸加答兒ノ一剖檢例

（兒科雜誌第二百一號）

醫學博士　太田孝之

一、胃及ビ大腸竝ニ小腸ノ下部ニ於ケル「カタル」性炎ト同時ニ淋巴裝置ノ增殖濾胞ノ輕度ノ潰瘍的變化、胸腺及ビ腸間膜腺ノ腫大多少ノ內臟實質細胞ノ變性ヲ認定スルコトヲ得タリ。

二、疫痢樣ノ症狀ノ發生ニ對シテハ急性腸炎トトモニ胸淋巴腺体質ノ協存ヲ重要ナル意義アリト信ズ。

三、本患兒ノ大便及死後大腸內容ヨリ普通大腸菌ニ一致スルモノノ外二種ノ菌ヲ分離セリ此分離菌ハ從來報告セラレタル疫痢菌ニ一致セズ依ツテ一二ノ動物試驗ヲ行ヒタルモ病原的關係ヲ說明シ得ベキ成績ヲ獲ザリキ。

四、疫痢ヲ現下暫ク單純ナル重症小兒腸炎ナル名稱ノ下ニ特別ナル注意ヲ與フルコトヲ便宜トス。

（小兒科教室金子抄）

○重症赤痢樣疾患ノ一例ニ於ケル細菌學的檢索

（兒科雜誌第二百一號）

醫學士　井手敏男

著者ハ疫痢樣症狀ヲ以テ始マリ裏急後重ヲ伴ハザルモ多量ノ粘液血便ヲ漏ラシ多少赤痢ト異ナル所アルモ尙ホ重症赤痢ヲ除外シ得ザルモノニ付キ細菌學的檢索ヲ行ヘリ。

一、患者血清ハ始メ大腸菌屬ニノミ凝集シタルモ後ニ至リテハ駒A、フレキスネル菌ノ如キ赤痢菌ニモ高度ニ凝集反應ヲ呈スルニ至レリ。

二、補體轉向作用ハ駒A、フレキスネル菌ニ著明ニシテ他ノ大腸菌ニハ著明ナラズ。

三、患者糞便ヨリハ前後七回二十幾株ノ菌ヲ分離シタルモ培養上赤痢菌ニ一致スルモノヲ得ズ。

四、伊東博士ノ疫痢菌ニ一致スル大腸菌屬ニシテ患者血清ニヨリ高度ニ凝集スルモノ三株ヲ得タルモ培養上凝

集反應上全ク同一ナルコトヲ確メタリ、該菌ハ赤痢多價血清ニ著明ニ反應ヲ呈シ疫痢樣疾患並ニ大腸加答兒及ビ一人ノ「チフス」患者血清ニ凝集反應ヲ呈セリ「モルモット」ニ徑口的ニ菌液ヲ與ヘシモ罹病セザリキ。

最後ニ氏ハ所謂疫痢ナルモノニ就キテ論ジテ曰ク。

「所謂疫痢ハ特種ナラザル種々ノ腸菌ガアル條件ノ下ニ或ル體質ト結ビツキテ起ス所ノ一ツノ中毒症狀ヲ伴フ腸炎ト信ズ」ト。（小兒科教室金子抄）

○支那小兒食餌ノ一部

（兒科雜誌第二百一號）

醫學士　齋藤秀雄

旅順北京奉天地方ノ小兒榮養法ニ就キ見聞セルコト左ノ如シ。

一、小兒出產後母乳乏シキ場合ニハ現今普通社會ニテハ牛乳又ハ「コンデンスミルク」ヲ用フルノ風習アリ。

二、牛乳ヲ購フコト能ハザル者ハ當初片栗粉又ハ葛等ヲ湯ニテ適度ニ溶キ之ニ蔗糖ヲ加味シテ與ヘ後數旬ニシテ高粱粉又ハ綠粉ニ水ヲ交ヘテ攪亂シ煮テ相當ノ糖ヲ加ヘタルモノヲ與フ。

三、生後約六ケ月ニ至レバ米粉又ハ高粱粉ヨリ製シタル團子ヲ與フルト同時ニ鷄卵ト「メリケン」粉トヨリ製シタル支那菓子ヲモ與フ。

四、生後八、九ケ月ノ後ハ小米飯、包米餅子、麥麵、大餅等ヲ大人先ヅ之ヲ試ニ咀嚼シテ與ヘ能ク之ヲ食スルニ至レバ後數旬ニシテ玉蜀黍ヨリ製シタル麵麭、饂飩、素麵等普通一般ノ食餌ヲ與フ。（小兒科教室金子抄）

神經科學

○神經伸展術ニ就テ

（神經學雜誌第十六卷第二號）

醫學士　瀧本義信

神經伸展術ノ發見及ビ其ノ歷史的梗概、神經伸展術ニ關スル實驗的研究ヲ擧ゲ神經伸展後ノ組織的變化ニ關スル著者ノ實驗的研究ヲ述ベ神經伸展術ノ臨床的價値並ニ適應症ヲ論ジテ曰ク伸展術ガ臨床的効力アルコトハ明カナレドモ此ノ効力ハ神經ノ傳達導路ノ斷絕ニ依ルモノナルガ故ニ伸展力ノ大サニ關係アルハ論ヲ俟タズ即チ伸展力弱キニ失スレバ唯一時的ノ「ショック」或ハ刺戟トナリ不滿足ノ結果ヲ得ルニ過ギザル可ク伸展力强キニ失スレバ目

的以外ノ副作用ヲ及ボスベシ例ヘバ從來ノ實驗ニ依ルニ知覺神經纖維ハ運動神經纖維ヨリモ其ノ抵抗力弱シ故ニ今疼痛ヲ治療スル目的ヲ以テ伸展シ其ノ力强キニ過ギタリトセンカ疼痛ノ消退ハ滿足ナル可キモ意外ノ運動障碍ヲ貽シ却テ失敗ニ終ルコトナキヲ保セズ是レ大ニ顧慮スベキ事ニシテ同時ニ伸展術ノ欠点ナリトス、尙一ッノ欠点ハ伸展ニヨリテ一時治癒シタル疾患ガ再發スル事ナリ是レ斷絕セル神經纖維ガ其ノ再生機能ニヨリ再ビ傳達經路ヲ修繕セル爲メニシテ元來ノ原因ノ除去セラレザル限リ疾病ノ再發ハ免レ得ザルナリ吾人ハ過去ノ文獻ニ於テ屢此ノ種ノ再發ヲ記憶ス、サレド伸展ニヨル斷絕ハ神經切斷ノ如ク一個所ニアラズシテ實ニ廣キ範圍ニ亘リテ多數ニ存在スルガ故ニ適當ニ行ハレタル伸展術ノ効果ハ左迄容易ニ沒却セラル可キモノニ非ラズ要スルニ伸展術ハ一ツノ姑息的療法タルニ過ギザレドモ非常ノ苦痛ヲシテ一擊ニ消散セシムル効力ハ他法ノ企及シ能ハザル特長ナリ。

神經痛ノ場合ニ神經切斷又ハ切除ヲ施行スルハ伸展術ヲ應用スルトハ共ニ一長一短アリ彼レニアリテハ効果ノ確實ニハアランモ神經機能ノ全廢ヲ免ル、コト能ハズ此ニアリテハ多少ノ欠点ヲ豫想スル代リニ適當ニ伸展スル時ハ副作用ヲ與ヘズシテ目的ヲ達シ得ベシ故ニ適當ナル伸展法ヲ研究セザルベカラズ實驗上坐骨神經ノ如キハ指ニテ伸展セバ充分力ヲ籠ムルモ容易ニ斷裂セズ予ハ家兎ノ試驗ニ於テ脊髓ニ多少ノ變化ヲ認メタリ此ノ所見ヨリスレバ假令斷裂セザル迄モ必要以上ニ伸展スルハ愼マザルベカラズ夫ノ「彈力性ニ且ツ可成中樞ニ近キ所ヨリ中樞ニ伸展スベシ」ト云フ考ニハ予モ又贊スルモノナリ伸展術ノ價値ハサルコトナガラ其ノ効果ハ組織ノ破壞ヲ要約トセルガ故ニ之ヲ應用スル際ニハ一段ノ考慮ヲ費サヾル可ラズ之ヲ謂ハレナキ皮膚病ニ應用シ又ハ朧氣ナル立論ノ下ニ中樞疾患ニ適用スルハ却テ伸展術ノ價値ヲ毀損スルニ止マルノミ而シテ予ハ其ノ適應症ト共ニ次ノ條件ヲ注意スル必要アリト思惟ス。

一、之ヲ適用セントスル疾患ガ他ノ方法ニテ治療シ得ザルコト且ツ症狀劇甚ナルコト。

二、之ヲ施行シタル後チ來リ得ベキ神經機能障碍ガ患者ニ重大ナル意義ヲ有セザルコト。

但シ後ノ條件ハ絕對的ナラズ例ヘバ上記ノ「エリトロメラルギー」ノ場合ノ如キハ假令少々ノ麻痺ヲ殘スモソハ已ムヲ得ザルナリ而シテ伸展術ノ適應症ニ關シテハ予ハ其ノ組織變化ノ結果ヨリ次ノ如ク規定スルヲ至當ナリト信ズ。

一、伸展術ハ神經ニ關係スル疾患ニ適用ス可キモノナリ。

二、中樞疾患ニ對シテハ末梢ニ於ケル疼痛又ハ痙攣ヲ頓挫セシムルヲ得ザレド疾患自己ニ對シテハ適應症トナラズ末梢ニ於ケル知覺及ビ運動麻痺ニ對シテモ又同ジ。

三、末梢神經疾患ニ就テハ其ノ刺戟狀態ニ對シテ適用ス可シ麻痺狀態ニ對シテハ却テ有害ナラン。

結論

一、神經伸展後ノ組織變化ニ關スル從來ノ研究ハ滿足ナルモノニアラズ。

二、予ハ家兎ヲ使用シテ時間的ニ伸展術ノ變化ヲ攻究シタルニ神經軸索及ビ髓鞘ガシュワン氏鞘內ニ於テ主トシテランテルマン氏截痕ヨリ斷絕シ所謂斷節形成ヲナスヲ認メタリ同時ニ神經鞘ニ出血及ビ充血結締織纖維ノ破壞等ヲ惹起シ爾後時間ノ經過ニ從ツテ神經纖維ニ變性ヲ現ハセリ。

三、ランテルマン氏截痕ハ單ナル人工產物ニアラズ「マルクセグメント」間ノ境界ヲ爲スモ普通立派ナル間隙トシテ存在スルニアラズ著明ナル間隙ハ外傷其他ノ障碍ノ爲メニ生ズ、之ノ意味ニ於テ之ヲ一種ノ變態ト認ム。

四、神經伸展術ノ効果ハ軸索ノ斷裂ニヨル、此事ヨリ伸展後ノ凡テノ症狀ヲ說明スルヲ得。

五、伸展術ノ臨床的價値ハ嚴密ニ評價スレバ一ツノ對症療法ニシテ方法ニヨリテハ効果不確實、再發等ノ欠点アルモ適當ニ行ヘバ殆ド完全ニ治療ノ目的ヲ達スル事ヲ得殊ニ他ノ療法ニテ到底効果ナキ劇痛ノ如キヲ頓挫スル偉力アリ。

六、伸展術ノ適應症トシテハ既ニ記載シタル他「エリトロメラルギー」ヲ加フベシ殊ニ本症ニ對シテハ疼痛ノミナラズ腫脹潮紅ヲモ除クコトヲ得。

七、「エリトロメラルギー」ガ血管開張神經ニ關スト云フ說ハ本病ノ症狀叢ガ伸展術ニヨリテ治癒セリト云フコトト密接ノ關係アルガ如シ。（神經科教室那谷抄）

○眞正癲癇ノ統計的觀察ニ就テ

（臨床醫學第五年第二、三號）

千葉醫學士　佐多芳久
京都醫學士　山縣佐十郎

著者等ハ東京築地山田病院ニ於テ過去六年間ニ治療セル神經系統ノ疾患患者五四一三人中ニ於テ眞正癲癇患者一一三人ニ就テ統計的觀察ヲ試ミ西洋ニ於ケル統計ト比較對照シ本邦ニ於ケル眞正癲癇ノ本態ニ關スル研究ヲ企テ

左ノ結論ヲナセリ。

一、眞正癲癇患者ノ全神經系疾患者ニ對スル比ハ二・〇九%ニシテ即チ略後者五〇人ニ對シ前者一人ノ比ニ該當ス。

二、眞正癲癇ノ發病率ハ男女全體ヨリ云フトキハ一一―一五歳ニ於テ最高クシテ二六・六%ヲ示シ之ヲ性別ニスルトキハ、男子ハ一六―二〇歳ニ於テ最高率二二・二%ヲ占メ女子ハ一一―一五歳ニ於テ最高率三六・六%ヲ示ス是ニ由リテ本邦ニ於ケル眞正癲癇ノ發病年齡ハ尙概シテ少年期ニシテ泰西ノ發病率ト略一致ス。

三、眞正癲癇ノ罹病率ヲ性別ニスルトキハ男子六三・七%女子三六・三%ナリ泰西ニ於ケル統計ハ種々ノ百分率ヲ示スモ吾人ノ統計ハペルゲルノ統計ト殆ド一致ス然レドモ幼年期ニ於ケル罹病率ハ之ニ反シテ女子ハ男子ニ優越スルコト尙泰西ニ於ケル統計ト類似ス。

四、癲癇發作持續時間ハ男女共五分間以內ノモノ最モ多クシテ三六・六%ヲ示シ之ニ亞グハ六―一〇分間以內ノモノニシテ二三・三%ナリ。

五、癲癇發作回數ハ月、數回以內ノモノ首位ヲ占メ男子三一・九%女子一四・四%合計四六・三%ヲ示シ第二位ハ一日數回以內ノモノニシテ男女共各一一・三%合計二二・六%ナリ。

年齡ニヨリ觀察スルトキハ概シテ幼年者ハ發作回數多クシテ年長者ハ發作少キガ如シ而シテ年齡及發作ニ於テ最高率ヲ示スハ一一―二〇歳ノ月、數回以內ニシテ子一八・六%女子九・二%合計二七・八%ナリトス。

六、發作狀態ハ初回發作ニ於テモ亦以後ノ發作ニ於テモ四肢ノ痙攣ニ意識消失ヲ伴フ者最モ多ク單ニ意識消失又ハ朦朧狀態等ヲ來スモノハ比較的少數ナリトス而シテ發作輕症ナルモノハ頻發シ重症ノモノハ發作ノ回數少キガ如シ。

七、眞正癲癇ノ直接遺傳ハ八・二%ニシテ泰西ニ於ケルランゲノ統計八%ト殆一致ス而シテ直接遺傳ハ尙泰西ニ於テシーボルト及ビゴウェルスノ統計ニ據リテ示シタルガ如ク本邦ニ於テモ亦母方ノ遺傳ハ父方ニ比シテ稍優レルノ觀アリ直接遺傳ヲ亨ケタル者ノ發病年齡ハ概一五歳以後ナリトス。

八、癲癇患者ニシテノ神經系疾患及精神病ノ遺傳ヲ亨ケタル者ハ一二・三%ニシテ泰西ノ統計ニ比シテ著シク劣レルヲ見ル是恐ラク本邦ニテハ未ダ泰西ニ比シテ神經系疾患及精神病ノ少キニ因ルモノト想像セラル。

九、眞正癲癇患者ノ兩親中飲酒癖ヲ有スルモノハ一六・

八%ニシテ悉ク父ナリ而シテ飲酒癖ヲ有スル親ニ生シテ癲癇ヲ發スル者ヲ性別ニ比較スルトキハ男三女一ノ比ヲ呈シ發病年齢ハ概シテ一〇歳以後ナリ。

一〇、眞正癲癇患者ニシテ血族結婚ノ兩親ニ生ヲ享ケタル者ハ六・〇%ニシテ男子ニ多ク女子ニ少シ。

一一、眞正癲癇ノ遺傳的關係ニシテ以上ノ外注意スベキハ先天性黴毒、姙娠中ノ母体精神感動兩親ノ年齢ノ差異甚シキコト等ナリトス。

一二、癲癇患者ノ擧子ハ泰西ニ於テハ低率ヲ示スモ吾人ハ之ガ統計ヲ示シ得ズ。

一三、癲癇ハ諸多ノ疾患ニ依リテ誘發セラルヽコト多ク傳染病、小兒ノ腦膜炎等ハ其主ナルモノナリ。

一四、頭部外傷ハ癲癇誘發ニ密接ノ關係ヲ有シ癲癇患者ハ八・八%ハ發病前ニ頭部外傷ヲ受ケタルモノナリ。

一五、女子ニ於テハ癲癇ノ月經初潮後ニ屢々發スルモノニシテ女子癲癇患者ノ一四・六%ハ即チ月經初潮後ニ發病シタルモノナリ且ツ月經ハ發作ヲ誘發シ又ハ不良ナル影響ヲ與フルコトアリ其他姙娠、分娩等女子生殖機轉ハ癲癇ニ惡影響ヲ及ボスコト少カラズ。

（神經科教室那谷抄）

○或ル種ノ癲癇ノ病理

(Bolten, Nouv. Icon. d. l. Salpet., 1914. Sept.-Dec., p. 350.)

ボルタン

一、特發性癲癇ト症候的癲癇トハ臨床上、必ズシモ每常一者互ニ區別スルコト能ハズ、發作ノ特徵自身ニ於テハ何等鑑別診斷ノ標準トナル可キモノナシ。

二、症候的癲癇ハ腦膜、皮質或ハ皮質下組織ノ種々ナル障礙ニ依リテ生ジ、之レハ頭蓋內腔ノ壓力ノ昇騰或ハ局部的硬化ノ作用ニ依リ大腦皮質ノ靜脈性亢血ヲ惹起スルニヨル。

三、特發性癲癇ハ食物ノ分解ニ依リテ生セル中毒性物質ニ基ク一種ノ慢性自家中毒症ナルカ或ハ甲狀腺及副甲狀腺ノ機能減退ノ爲、細胞ノ新陳代謝ニ依リテ生セル毒素ヲ完全ニ中和スルコト能ハザルニ基クモノ也。

四、之ノ二種類ノ癲癇ニ於テ、大腦皮質ハ、毒素ヲ以テ徐々ニ亢盈セラル如クナル即チ症候的癲癇ニアリテハ淋巴性及靜脈性亢血ハ機能減退ノ代謝產物ナル毒物質ノ堆積ヲ特種ナル部位即チ大腦ノ運動中樞領域ニ起スヲ以テ也。

五、故ニ癲癇發作ノ襲來ハ之レ等ノ毒素ヲ避ケムトスル

臟器側ノ反應ニ外ナラズ。

六、特發性癲癇ニアリテハ眞ノ杭癲癇的療法ハ機能減退セル諸腺ノ就中、甲狀腺並ニ副甲狀腺ノ新鮮ナル越幾斯ヲ直腸內ニ應用スルニアリ。斯ノ如キ信念ト確信ヲ有スル著者ニ依リテ述ヘラレタル結果ガ、臨床上ノ實驗ニ依リテノ判定セラルルヤ如何ヲ定ムルコトハ興味アルコトナラム。（神經科教室喜多抄）

○前角炎ノ血清療法

(Simon Flexner, Journ. Amer. Med. Assoc., 1916, lxvii., Aug. 19, pp. 583-4.)

シモン、フレックナー

脊髓前角炎ノ襲來ヨリ回復セル猿ハ實驗上本病毒素ノ再接種ニ成功セザルコトハフレクスナー及レーヴイス氏ニ依リテ公表セラレタリ。本病ニ罹リタル人類ノ本病ヨリ回復セルモノノ血中ニハ免疫物質ヲ含有シ前角炎ノ毒素ヲ中和スルコトモ既ニ報告セラレタリ。之レト同樣ノ結果ハ本毒素ヲ以テ猿ヲ自動免疫スル事ニ依リテ得ラル。フレクスナー、レーヴイス二氏ハ免疫セラレタル猿及人間ノ血清モ亦、生活毒素ヲ以テ腦內或ハ鼻內ニ接種セラレタル動物ニ於テ前角炎ノ發生ヲ妨ゲ得ルコトヲ發見セリ。治療的接種ハ毒素ノ感染後十八—二十四時間以內ニ於テ脊髓內ニ行ハレタリ、何トナレバ毒素體內ニ入ルトモ腦膜ニ於テ形成セラルレバ也。ネッター氏ハ初メテ人間ニ於テ本病ノ療法ニ之ノ事實ヲ應用セリ、氏ノ結果ハ良好ナリキ。氏ハ既ニ、三十年以前ニ於テノ前角炎ヨリ回復セルモノノ血清ヲ用ヰタリ、注射ハ診斷セラレタル後ハ出來得ル限リ速ニ硬腦膜下ニナサレタリ、五—二十竝ガ最適量ナリト云フ、斯ノ如キ注射ハ臨床上ノ狀態ヲ參酌シテ二十四時間ノ間歇ヲ以テ行フ可ク、勿論輸血者ハ健康狀態ナラザル可ラズ。（神經科教室喜多抄）

○小兒麻痺ノ本態、傳播方法及豫防法

(Simon Flexner, Archives. of Pediat., 1916. Aug. u. Pediatries. 1916, XXVIII, Aug.)

シモン、フレクスナー

小兒麻痺ハ人工培養ニ依リテ確メラレタル么微ナル濾過シ得ベキ微生體ニ依リテ生スル中樞神經系統ノ障害ニ因スル一ノ傳播性疾患ナリ、而シテ斯ノ如クナルコトハ强度ノ顯微鏡下ニ於テ明カニ知ルコトヲ得、之ノ么微有機体ハ鼻及氣管ノ粘膜上及本病ニ罹レル人ノ腸中ニ存スレ𪜈流血中ニハ未ダ嘗テ發見セラレズ、本毒素ヲ猿ニ注射

スレバ人間ノ小兒麻痺ニ一致セル病型ヲ起シ得、而シテ健康人ノ鼻、氣管ノ粘膜ハ若シ本病ノ急性ナルモノト接觸スルヤ例ヒ粘膜其物ハ疾患其自身ノ發生ニ關係セズトハイヘ毒素ヲ以テ惡染セラレ且ツ他人ニ傳染セシメ得ルコトモ證明セラレタリ、毒素ハ感染セラレタル個体ヨリ咽頭、鼻ヨリノ分泌セラレテ體外ニ逃ル、若シ嚥下セラレタルトキハ腸中ニ分泌セラル、亦鼻、氣管ノ粘膜ヲ通シテ內臟中ニ入リ淋巴道ニ依リテ神經系統ニ達ス、毒素ハ溫度又ハ緩漫ナル化學藥品ニ依リテ破壞セラレズト雖モ之レニ日光ヲ曝露セシムレバ死滅ス、昆蟲ハ其毒素ノ器械的運搬者タルコトアラムモ毒素ノ直接ノ運搬者トナラズ。潛伏期ハ大凡、八日間以上ヲ出デズ、然ルト雖モ二日ヨリ二週間或ハソレ以上ニ遷延スルモノアリ。

傳播ノ危險ノ最大ナルハ其極初期ニシテ然カモ急性期也毒素ハ身體中四五週間以上止ルコトナシ、故ニ症候發生以來六週間以上監視セラレタル場合ハ感染ノ危險ナシ、一度感染セバ血中免疫物質ノ形成ニ依リテ殆ンド常ニ免疫ヲ得。

治癒シ免疫物質ヲ得タル猿ヨリ採取セル血清ハ治療上ニ價値アルコトヲ認メラレタレモ他ノ動物ハ免疫血清ノ生產ニ不適ナリト觀察セラル、然カモ猿ハ實際的ニ之レヨリ充分ノ供給ヲ得ル動物ニモアラズ、藥劑中使用シ可キ唯一ノモノハ「ヘクサメチユ！レンテトラミン」ナリ。

本病ハ一般ニ回復ノ傾向ヲ有ス、但シ麻痺ガ腦、脊髓ノ部分ヲ犯シ呼吸及心動ノ調節ヲ犯ス時ニ於テ死ヲ致ス。數多ノ流行ノ平均死亡率ハ一〇％以下也。

（神經科教室喜多抄）

醫化學

○南洋ノ魚毒「ツーバ」(Tuba)ノ有毒成分ノ研究

（東京醫學會雜誌第參拾壹卷第四號）

石川武雄

「ツーバ」(Tuba)ハマレー群島及ビマラッカ半島ニ野生又ハ栽培セラルル蝴蝶形科ニ屬スル一種ノ有毒植物ナリ。其根部ハ同地方ノ土人ニヨリ魚獵並ニ驅蟲ニ使用セラル。著者ハボルネオ產ノ「ツーバ根ノ「エーテルエキス」ヨリ著者ノ所謂「ツボトキシーン」(Tubotoxin)ナル一有毒物質ヲ得、其化學的並ニ藥理的研究ヲ行ヒタリ。

「ツボトキシーン」ハ雪白色・光輝アル無臭無味ノ結晶ニシテ窒素ヲ含マズ、大氣中ニテ變化セズ、一六三・五度ニ

於テ融解シ、「クロロフォルム」「ベンゾール」ニ容易ニ溶解シ、反應中性ナリ。

其「ベンゾール溶液(一・一一%)ハ偏光面ヲ左旋シ、二二五・二度ノ比旋ヲ有ス $[\alpha]_D^{29,5°} = -225,2°$ 又此酒精溶液ハ常温ニ於テ「アムモニア性硝酸銀液ヲ還元シ、$C_{18}H_{18}O_5$ ナル分子式ヲ有ス。

冷血動物(鯉、蛙)及温血動物(南京鼠、家兎及犬)ニ就キテ「ツボトキシーン」ノ藥理的作用ヲ研究シタル結果ニヨレバ、最モ顯著ナル中毒症狀ハ全身運動麻痺及呼吸困難ナリ。即チ此「トキシーン」ヲ注射スレバ、先ヅ血壓少シク上昇シ、尋テ漸次下降ス、要之延髓ニ於ケル呼吸中樞並ニ血液運動中樞ヲ麻痺セシム。温血動物ニ在リテハ痙攣中樞ノ刺戟ニヨリ間代性痙攣ヲ發スル事アリ。

又「ツボトキシーン」ヲ犬ニ内服セシムレバ胃迷走神經知覺纖維ノ末端ヲ刺戟シテ嘔吐ヲ發シ、蛙心臓ニ作用セシムレバ直接ニ心臓自己ヲ障碍シ、就中心臓刺戟傳導系統ヲ侵シテ Herzblock ノ狀ヲ呈ス。

本毒素ノ最小致死量ハ家兎耳靜脈内注射ニヨレバ体重一瓩ニ對シテ〇・九瓩ナルモ、之レヲ皮下ニ注射スルカ、又ハ内服セシムレバ吸收頗ル緩慢ナルガ故ニ從フテ致死量ニモ著シキ相違アリ。

且著者ハ「ツボトキシーン」ト魚藤ノ有毒成分「ロテノール」ノ作用ヲ比較シ其相違点ヲ說述セリ。(本文廿九頁、附圖四葉)(醫化學教室内海抄)

○胃癌組織ノ知見補遺 附 健康日本人胃液ノ總酸量並ニ遊離鹽酸量ニ就テ

(日新醫學第六年第六號)

九州帝國大學醫科大學三宅外科教室
醫學士　泉　伍　朗

著者ハ胃癌患者五百六十八人、並ニ其内胃癌切除法ヲ施セル三百三十五例ニ就キ、種々ノ方面ヨリ統計的及組織的研究鑿ヲ行ヒタリ。

著者ハ先ヅ胃癌ノ種類、發育及轉移、再發、根治、胃癌ト胃潰瘍トノ關係等ノ項ヲ設ケテ詳述シ、次デ胃癌診斷ノ補助法トシテ用ヒラルル鹽酸缺乏症ノ意義ニツキ實驗セリ。著者ハ健康日本人三十名ニ白粥一合白湯二百瓩ヨリ成レル朝試食ヲ與ヘ、三十分乃至四十分ノ後胃液ヲ採集シ、十分ノ一定規苛性曹達液ヲ以テ滴定セリ。其結果ニ依レバ總酸度ハ平均一・二八‰、遊離鹽酸ノ濃度ハ平均一・〇五八‰ナル事ヲ看タリ。著者ハ之ヲ規準トシ、鹽酸量ガ胃癌其他ノ疾病ニ於テ如何ニ變化スルカヲ觀察セ

リ。而シテ氏ハ切除可能ノ胃癌患者ニ於テ七二・二%、切除不可能ナリシ患者ニ於テ七六・%ノ鹽酸缺乏症アル事ヲ實驗セリ。故ニ胃癌ト鹽酸缺乏トノ間ニ何等カノ關係アルハ明カナリ。然シ膽石症ニハ五二・%、膵臓炎ニハ五〇・%ノ鹽酸缺乏症アリシコト、腎臓炎、肺結核、十二指腸蟲、精神病患者ニモ亦鹽酸缺乏症アルコト、並ニ癌進行ノ程度ト鹽酸缺乏症トノ間ニ定型的關係ナキ事、胃癌手術前後鹽酸量檢査ノ結果、鹽酸缺乏症ノ存否ハ胃癌其物ノ存否如何ニ據ラザル事等ノ實驗ニ基ヅキ、鹽酸缺乏症ハ胃癌ニ特有ナルモノニ非ラズト斷定セリ。

次ニ著者ハ新鮮ナル胃粘膜ニ就キ鍍銀法ヲ以テ被覆細胞ノ分泌顆粒ヲ檢シ、此顆粒ト鹽酸含有量ノ消長トヲ比較對照セリ。其結果ニヨレバ遊離鹽酸過多症ノ場合ニハ被覆細胞ノ數ヲ增シ、各細胞内ノ分泌顆粒密トナリ、遊離鹽酸缺乏症ノ時ニハ被覆細胞ハ大多數退行變性又ハ萎縮ヲ來シ、縱令多數ニ存シ、外觀常態ヲ呈スルニモ係ラズ、分泌顆粒ハ疎トナリ、又大小不同トナリ、或ハ全然認メ得ベカラザルニ至ル。故ニ分泌顆粒現出ノ狀況ハ遊離鹽酸量ト大体ニ於テ併行的關係ヲ有スルモノトナシ、從テ酸分泌ノ消長ハ此分泌顆粒ノ存否ニ至大ノ意義ヲ有スト結ベリ。（醫化學教室今井抄）

○血液及尿中ニ於ケル微量糖定量法ニ就テ

（東京帝國大學醫科大學紀要第十六卷二號）

百々瀨玄溪

糖ノ重金屬ニ對スル還元力ハサマデ大ナラザルガ故ニ、之等兩者ニ於ケル反應ヲ終結セシムルニハ啻ニ高温度ヲ要スルノミナラズ、永キ時間ヲ要ス。加之糖ノ還元力ハ其濃度及銅ノ濃度ニ關スルガ故ニ、糖ヲシテ十分ナル作用ヲ發揮セシメ、正確ナル結果ヲ得ント欲セバ須ク嚴密ナル要約ヲ導守スルヲ要ス。

著者ハ以上ノ理由ニ基キペキー、隈川、須藤氏法トバング氏法トヲ巧ニ連結シテ滿足ナル糖定量法ヲ案出セリ。其ノ方法ヲ略叙スレバ次ノ如シ。

空氣ノ觸接ヲ杜絶セル過剩ノペキー、隈川、須藤氏ノ「アモニア銅液」ニ一定量ノ被檢糖液ヲ注ギ、一分時間煮沸シ、糖作用ノ完結シタル後、一定濃度ヲ有スル「ヒドロクシールアミーン」溶液（其五・〇竓ヲシテペキー、隈川、須藤氏ノ第一及第二溶液各二〇・竓即チ〇・〇一瓦ノ無水葡萄糖ニ等價ナラシム）ヲ以テ滴定シ、其ノ消費量ヨリ糖量ヲ算定ス。

著者ノ新法ニ要スル裝置ハ概ネ隈川、須藤氏等ノ裝置ニ

類スルモ、彼ニアリテハ還元コルベン」ノ口徑ヲ著シク大ニシ、コレニ適スル護謨栓ニ二個ノ孔ヲ穿チ、五瓩ノ被檢液ヲ充セル活栓付ピペット」ト「ヒドロクシールアミーン」ヲ充セル「ビユレット」ノ尖端トヲ挿入セリ。爾餘ノ点ニ於テハ兩者共全然同一ナリ。

本法ヲ血液中ニ存スル糖ニ應用セント欲セバ、豫メ Rona & Michaelis ノ膠態水化鉄沈澱法ヲ用フルカ、又ハ著者ノ規定セル硫酸加里、醋酸法ニヨリ所含ノ蛋白質ヲ除去スルヲ要ス。

新法ニヨレバ啻ニ尿糖ノ滴定ニ恰適スルノミナラズ一瓩ノ血液又ハ血清中ニ存スル糖量ヲモ確實ニ定量シ得ルガ故ニ、患者ニ何等嫌惡ノ感ヲ起サシムルコトナク、反復其血糖量ヲ觀察スルコトヲ得。（醫化學教室井上抄）

○女性生殖器及ビ胎盤内ニ存スル凝固抑壓性物質ニ就キテ

（Biochem. Z. Bd. 66, H. 4 & 5, S. 368.）

藤井虎彦

著者ハ本問題解決ノ一手段タル血液凝固ノ定量的檢査法トシテ Wohlgemuth 氏法ヲ採用セリ。即多數ノ試驗管ニ一・〇—〇・〇〇二瓩ノ新鮮ナル犬ノ血清（纖維酵素ヲ有ス）ヲ注ギ、之ニ一定量（〇・五瓩）ノ被檢臓器ノ水浸液ト一定量（二・瓩）ノ十倍ニ稀釋セル鹽漿（「硫酸マグネシウム＝プラスマ」）トヲ追加シ、氷室内ニ放置スルコト二十四時間ニシテ酵素ノ作用即チ凝体ノ發生如何ヲ檢セリ。

對照試驗トシテハ右水浸液ノ代リニ一％ノ純食鹽水ヲ加ヘタルモノヲ以テセリ。本試驗ニ用ヰタル水浸液材料ハ人屍及ビ新鮮ナル動物屍ヨリ摘出シタル子宮、輸卵管、卵巣ニ其十倍量ノ一％ノ純食鹽水ト、少量ノ「トルオール」トヲ加ヘ研和シテ得タル濾液ナリ。

以上ノ實驗法ニヨリテ得タル結果ニ據レバ、子宮、輸卵管、卵巣ハ纖維酵素ノ作用ヲ強ク抑壓スル物質ヲ含有ス。而シテ此物質ハ臓器ヲ細挫スル事ニヨリテ容易ニ浸出シ得、且臓器ノ自家融解ニヨリテ其一部分ヲ遊離スルモノノ如シ。著者ハ又 Schickele 氏ノ發見セル如ク、卵巣ハ子宮ヨリモ抑壓性物質ニ富メル事ヲ證シ、輸卵管ノ抑壓性物質ハ子宮ノ夫ニ匹敵スト云ヒ、子宮ノ粘膜及ビ筋層ノ水浸液ハ十例中四例ハ同ジ强サニ作用シ、三例ハ筋層ノモノ優リ、三例ハ粘膜ノモノ强ク、從ウテ Schickele 氏ノ子宮粘膜ノ抑壓性物質ハ常ニ子宮筋層ノ夫ヨリモ多量ナリテフ所説ヲ肯定スル能ハズトナシ、尙ホ老幼ニ拘ラズ此物質ヲ有スルニヨリ Schickele 氏ノ生殖可能ノ年

齡以外ニハ子宮、卵巣ニ此物質ヲ欠クト云ヘルニ贊同シ難キヲ述ベタリ。

著者ハ更ニ動物ノ生殖器ニ就イテ研索セルニ、自家融解ヲ起サザル新鮮ナル臓器ニ於テモ、之ヲ細挫スル時ハ其水浸液中ニ容易ニ抑壓性物質ヲ得ベシトナシ、唯犬ニ於イテハ卵巣ヨリ浸出セルモノハ子宮ヨリセルモノニ優リ家兎ニ於テハ之ニ反スト附加セリ。

次デ著者ハ完全ニ血液ヲ除キタル三個ノ新鮮ナル胎盤ニ就キ、前述ノ方法ニヨリテ研究シタルニ、著明ノ抑壓作用ヲ認メ、自家融解ノ進ムニ從ヒ、ソノ作用ノ增進スルヲ證セリ。

著者ハ更ニ胎盤ハ「エレプシン」ノ作用ヲ有スト云ヘルSavaré氏ノ説ヲ決定セントシ、「胎盤エキス」ニ一定量ノ「ペプトーン水」ヲ加ヘ、一定時日ノ後Sörensen氏ノ「フォルモール滴定法」ヲ試ミタルニ、日ヲ經ルニ從ヒ、滴定シ得ベキ窒素（換言スレバ「アルブモーゼ・ペプトーン」ヨリモ低級ナル分解產物）量ノ增加スルヲ認メタリ。

（醫化學教室橋本學抄）

○尿中蛋白及糖ノ迅速定量法

（Deutsch. med. Wochenschr. 1915.Nr. 43.）

エミル、レンク

一、蛋白定量法、

エスバッハ氏蛋白計ノ「U」記號迄驗尿ヲ入レ、次イデ「R」記號迄エスバッハ氏試藥ヲ注加スル事從來ノ如シ、之レニ一小刀尖量ノ輕石粉（Bimsstein）ヲ混ジ栓ヲ施シ十回該管ヲ逆倒セシム（液ヲ混加セシムルタメ）此際振盪スベカラズ、次イデ該管ヲ十分間靜置セバ其ノ量ヲ知リ得ベシ、勿論蛋白含量大ナル尿ハ稀釋法ヲ行フ事亦從來ノ如クス。

二、糖定量法。

本法ニハ次ノ諸試藥ヲ準備スベシ。

第一液。五〇〇・〇瓩ノ溜水ニ三四・六四瓦ト硫酸銅ヲ投ゼシモノ。

第二液。五〇〇・〇瓩ノ溜水中ニセニエット氏鹽（Seignette Salz＝Weinsaures-kalinatron）一七三瓦及ビ苛性ナトロン六〇・〇瓦ヲ混ズ。

第三液。五〇〇・〇瓩ノ水中ニ「フェロチアンカリウム」一五・〇瓦及ビ一％醋酸液一二五・〇瓩ヲ加フ。

以上第一液五・〇瓩ニ第二液五・〇瓩ヲ混加シ五〇・〇瓩ノ水ニ稀釋ス、之レヲ煮沸シツツ徐々ニ此ノ中ヘ檢尿ノ極小量ヅツヲ間歇ヲ以テ注加ス、然シテ加尿毎ニ其ノ一滴ヲ時計硝子上ニ滴下シ之レニ第三液ノ一滴ヲ注加シ全ク

紅褐色ノ「フエロチアン」銅ノ沈渣ヲ生ゼザルニ至リテ本操作ヲ終ル。於茲檢尿ノ使用量ヲ計算ス、今若シ本試驗ニ五倍ニ稀釋セル尿二〇・〇瓩ヲ使用セリト假定セバ、還元ニ要セル實際尿量ハ四・〇瓩ナリ故ニ次ノ如キ比例式ヲ得 $4:0.05=100:x$ ∴ $x=1.25$ 即チ糖量ハ一・二五%ナリ。（婦人科教室波々伯部抄）

病理學

○恙蟲病原研究追加（第三）大正五年度新所見

（中央醫學會雜誌第百三十號）

醫學博士　林　直　助

著者ハ恙蟲病研究ニ指ヲ染メテヨリ十年、其ノ間病理解剖學及病原ニ關スル諸多ノ報告ヲ公ニシタルガ本論文ハ其ノ續篇ナリ。諸種ノ圖表ヲ挿ミテ細胞封入ノ顆粒ノ狀態ヲ詳說シ。其ノ顆粒ヲ精査スレバ各種ノ移行ヲ認メシメ、生物ノ發育循環像ト見ベキモノトナシ、之ヲ以テ恙蟲病原ガ原蟲トシテノ絕体像トナセリ。而シテ原蟲ノ種屬ハ「ピロプラスマ」ニシテ其發育循環ハコンデルノ「タイレリヤ、バルバ」ノ其レト大同小異ナリトナセリ。（病理學教室中村抄）

○赤蟲母蟲及ビ「ニンフェー」間ノ蛹及ビ赤蟲母蟲ノ習性ニ就テ

（北越醫學會雜誌第三十一年第六號）

醫學博士　川村麟也
山口正道

著者ハ恙蟲病々原媒介者タル赤蟲母蟲ノ發見ニヨリ其ノ「ニンフェー」ノ化シテ母蟲トナル徑路ニ就イテ研究セリ。著者ハ「ニンフェー」ノ成蟲ニ化スル時期ヲ天然ノ狀態ニ於テ探索シ、其ノ形態的關係ヲ明カニセリ。有毒地ノ土砂ヨリ本蟲ヲ發掘スル際ニ一々之レヲ精査シ、殊ニ其ノ蛹化時ヲ捕ヘントセシニ如斯者二個ヲ捕獲シ得タリト。其ノ一ハ長サ〇・八七六八粍、幅〇・四三八四粍ニテ其形略橢圓形ニテ腹部ト見做スベキ側ニ四對ノ囊狀ノ突起ヲ出ス其ノ第一對ハ太クシテ長シ第四對ハ太サハ他ノ突起ト略同シナレモソレヨリ長シ、其ノ反對側ニ於テ殆ンド第二及第三對突起ノ間ノ高サニ相當シ三角形ノ劍狀突起アリ、其ノ高サ〇・〇四一六粍、長サ〇・〇七〇七粍アリ。蛹ノ表面ハ皺襞ヲ有スル無色ノ「アポデルマ」ヨリナリ、其ノ上ニ所々强キ先端ノ鋭ナラザル數多ノ側毛ヲ有スル硬毛ヲ附着ス、其ノ性質ハ「ニンフェー」又母蟲ノ体表ヲ被フ者ト同一ナリ。コノ「アポデルマ」ノ下ニ淡赤色ヲ帶ブ

ル蟲体ヲ透見ス、蟲体ハ殆ンド出來上リ体表ニハ「ニンフェー」或ハ母蟲ニ見ルガ如キ無色ノ硬毛ヲ簇生ス、脚ハ明カニ各部分ニ區別シオリ鉤爪著明ナリ。

他ノ一例ハ長サ〇・八七六八粍、輻〇・六一三八粍ヲ算ス其形態的關係ハ前者ニ同ジ。唯「アポデルマ」内ニアル蟲体ハ尙ヨリ完全ニ發育シ居リ、既ニ爬出ニ適セルガ如シ。蟲体ハ赤蟲「ニンフェー」或ハ母蟲ニ同ジク胸腹部ニ於テ著シク綾窄セラル。蟲体ノ長サ硬毛迄ヲ合計シ〇・七五四〇粍、幅ハ胸部〇・四〇三三粍、胸腹狹窄部〇・三八五八粍、腹部〇・四七八六粍アリ、前者ト同樣硬毛ヲ以テ被ハル。

以上ノ所見ヨリシテ前上二個ノ蛹ハ赤蟲ノ「ニンフェー」及成蟲ノ間ノ發育期ニ屬シ、多少其ノ發達ノ度ヲ異ニセルモノナル事疑ヒナシ。而シテ二者共「アポデルマ」ノ下ニ明カニ蟲体ヲ透見シ、其ノ体表ニハ尙舊皮ヲ附着シ居リ其ノ硬毛ノ性質ハ全ク「ニンフェー」ノソレト同一ナルヲ以テ、著者ハコノ時期ヲ以テ恐クハ「ニンフェー」ノ蛹化シ成蟲ニ化スルモノナル事ヲ信ジタリ。

赤蟲成蟲ノ習性ヲ明カニセン爲メ、有毒地ノ土砂ヲ掘リ成蟲ヲ探索シ九月ヨリ以降三ケ月間ノ觀察ニレバ九月中旬迄ニ得タル成蟲ニハ尙ホ卵子ヲ有セルガ十月以後ニ採取セルモノニ於テハコレヲ見ル事困難ナリキ。夏時ニ於テハ地表二三寸ニ存在セルモノガ十一月以後ニ於テハ二三寸ノ所ニ存在セズ三四寸乃至六七寸ノ深サノ間ニ存在ス、又數ニ於テモ減退ス。斯ク赤蟲母蟲ハ夏時ニ於テ蕃殖ヲ營ミ冷氣ノ襲來ト共ニ大部分ハ死滅スルモノナリ冬期ニ向ヒタルトキニ之レヲ組織的ニ檢シタルニ生殖器ハ著シク縮小シ、肝胃ハ擴張シテ大ナル脂肪体ヲ以テ充滿セラルルヲ見ルト。

亦採取セル蟲体中、母蟲ト「ニンフェー」トノ關係ハ九月及十月初旬ニ於テ「ニンフェー」ハ成蟲ニ比シテ少ナク百隻ニ對シテ約一隻位ノ比例ナルガ、冷氣ノ增スト共ニ「ニンフェー」ノ數モ增シ十一月中旬ニ於テハ其ノ比百ニ對シテ十乃至十五ノ比ニ存在ス。コレ氣候ノ寒冷トナルニ從ヒ「ニンフェー」ノ蛹化スル時ヲ要スル爲メニテ丁度赤蟲ノ蛹化ガ氣候ノ寒冷ト共ニ遲ルルト同樣ナリト。

（病理學教室松田抄）

○粗大寄生動物性疾患ニ於テ免疫ノ獲得アリヤ

（京都醫學雜誌第十三卷第三號）

醫學博士　藤浪鑑

著者ハ中村博士後ニ楢林學士ト共ニ日本住血吸蟲病研究

ノ際ニ人及動物ニ於テ其免疫性獲得ヲ想像シ得ベキ一二ノ事實、之ト反對ニ重複感染ノ可能ヲ考ヘラルベキ二三ノ事實ヲ見聞シ、尙其後著者ハ馬ノ本病ニ對スル實驗中馬ニ於テハ本寄生蟲ノ早ク死滅スル事ヲ知リ、次ニ馬ノ免疫性獲得ノ有無ニ關シテ實驗セリ。其ハ二年前十分ナル感染ヲナサシメタルモノニテ、目下ハ其寄生蟲ノ殆ンド死滅シタリト推測スベキ馬一頭ト、對照ノ未ダ全ク感染セザル健康ナル馬二頭トニ就テ再ビ感染試驗ヲ行ヒタルニ、上述前ニ感染セシメタル一頭ニ於テハ一隻ノ本生活寄生蟲モ發見セザリシニ對シ、對照馬二頭ニ於テハ萬以上ノ寄生蟲ヲ發見セリト。而メ其組織的變化モ亦一致セリト。故ニ馬ニ於テハ日本住血吸蟲感染ニ對スル免疫性ノ獲得アルハ、事實ナラント曰ヘリ。而メ著者ハ尙此實驗ヲ以テ、他ノ場合ニ於ケル重複感染ノ不可能ナルヲ斷定スルモノニアラズト追加セリ。（病理學教室岡部抄）

○所謂異所的脉絡膜上皮腫ノ腫瘍學的知見補遺

Beiträge zur onkologischen Kenntnis der sogenannten heterotopischen Chorionepitheliome.

醫學士　保田收藏

(Mitteilungen. aus der Medizinischen Fakultät der Kaiserlichen Universität Kyushu. 1916. S. 181)

著者ハ從來報告セラレシ脉絡膜上皮腫ヲ三別シ第一種ニ屬スルモノハ正常或ハ異常分娩ト密接ノ關係ヲ有スルモノニテ子宮腔ニ發生スルモノナリト而シテ著者ハ便宜上之ヲ原型(Originaltypus)ト稱セリ、尙其發生ニ關スル諸家ノ說ヲ擧グ。

第二種ニ算入スベキモノハ正常又ハ異常分娩後一定期間中ニ於テ子宮外ノ臟器ニ生ズルモノニシテ、之ニ異發型(ektopischer Typus)ノ名ヲ與ヘタリ而シテ其Ektopieノ眞ニ可能性ナルヤ否ヤニ關シテハデユンゲル氏ノ報告セル兩側ノ肺ニ於ケル脉絡膜上皮ノ栓塞ノ例ヲ引用シ且其融合細胞栓塞ノ往々骨髓巨大細胞等ノ他ノ巨大細胞トノ彼此混同ノ避ケ難クシテ注意スベキヲ極論セリ。

而シテ此種類ニ屬シムベキ次ノ實驗例ヲ報告セリ

其ハ分娩後數年ニシテ死亡シタル二十八歲ノ女子ニシテ剖檢上原發性小腸癌腫、右肺、肝臟、左腎、及腸間膜腺並ニ腦ノ續發性癌腫ノ診斷ヲ與ヘラレタルモノニシテ其顯微鏡的所見ニ於テ全ク完型性脉絡膜上皮腫ナルヲ知レリ而シテ本腫瘍ノ出血性及壞疽性傾向ノ甚ダシキト此例

ニ於ケル腫瘍ノ性狀ト一致セルヲ以テ異發的脉絡膜上皮腫(ektopisches Chorionepithelion)ト診斷シ且結論スラク原發竈ト見ルベキ脉絡膜ノ早期轉移セルモノノ分娩ノ後發育增殖スルモノナルヤ或ハ眞ノ Ektopie ノ意味ニ於テ生ズルモノナルカ實地上解決セントスルハ容易ナラザレド學理上眞性異發(echten Ektopie)ノ可能性ナルヲ信ズルモノナリト。

第三種ニ屬スベキハ姙娠ニ關係無ク男子及女子ニ於テモ來ルモノニシテ著者ハ之ニ畸形型(Teratoidtypus)ノ名稱ヲ與ヘ而シテ著者ハ其發生ニ關係スル諸家ノ知見ヲ列擧シ次ノ實驗例ヲ報告セリ其ハ五十四歳ノ男子ニシテ其主要ナル解剖的診斷ハ右側肋膜ノ原發性癌腫並ニ原發部ニ連接セル上空靜脉腔及右側無名靜脉ノ續發癌加フルニ右側肺門部及肺門部淋巴腺、副腎ノ續發癌トアリタルモノノ顯微鏡的所見ニ於テ一般ニ單純性癌腫ノ如キ造構ヲ有スレモ其胞巢ノ細胞ハ一ハラングハンス氏細胞ト同ジク他ハ融合細胞ト同ジキ二種ヨリナリ而シテ副腎ニ於テハ同樣二種細胞ヨリナルト雖モ稍異ナル造構ヲ呈シ乳嘴狀腺腫性癌腫ノ如ク其腺窠ノ周圍ニ於テ融合細胞ト同樣ノ細胞ヲ證明シ其腺窠腔ニハ赤血球及脫落セル脫出核及變性セル腫瘍細胞ヲ包含セルヲ證明セリ其間質ニ於テ副腎皮質細胞ノ遺殘ヲ認ム即チ副腎皮質ノ毛細管內壁ノ增殖ナラント故ニ著者ハ此例ニ於テハ其融合細胞ハ胞巢ノ周圍ニ一列又ハ二列ニ排列ス(特ニ副腎ニ於テ著明ニ見ル)最後ニ著者ハ論ジテ曰ク此實驗例ニ於テ恐ラク肋膜ノ內皮細胞性癌腫ニシテ而シテ融合細胞ハ淋巴及血管毛細管ノ內皮細胞ノ變化セルモノナラント特ニ副腎ニ於テ其腫瘍細胞ノ皮質毛細管內面ニ且赤血球ノ其腺窠中部ニ包含セラルルニヨリテモ明カナラント而シテ其周圍ノ內皮細胞ノ融合細胞ニ化スルノ說明ハ至難ナレドモ思フニ其腫瘍細胞增殖ノ際ニ於ケル理化學的影響ニ因ラントセリ。(病理學教室岡部抄)

○脊髓脂肪腫ニ就テ

(京都醫學雜誌第十四卷第一號)

醫學士　藤繩喜代藏

三十九歳織物職女ニシテ七、八年前ヨリ身体違和アリ、漸次胸廓部ノ屈曲ヲ來シ、右下肢ノ知覺及運動麻痺ヲ覺ヘ次デ左側ニ同樣ノ症ヲ現ハシ、且兩便失禁アリテ、臨床的ニ慢性脊髓炎ノ診斷ヲ下サレ。剖檢上諸多ノ病的變狀ト共ニ脊髓ノ頸膨大ヨリ胸部ニ亘レル(太キ所拇指大)脂肪腫ノ見出サレシモノニ就テ、其ノ病理解剖學的及組

織學的研究ヲ遂ゲ、其ノ客觀的事實ノ報告ヲ主トシ、其ノ發生ニ關シテハ臆說ヲ避ケタリ。但迷芽說ニ贊スベキ根據ヲ有セズトナセリ。（病理學教室中村抄）

細菌學

○「あるこほる」中毒ト抗體トノ關係

（日本微生物學會雜誌第五卷一月號）

醫學士　猪木正雄

「あるこほる」中毒ト抗体（殺菌素、防禦、凝集素、溶血素）トノ關係ニ就テ其ノ文献ヲ徵スルニ動物ニ連日「あるこほる」ヲ飲用セシムル時ハ一般ニ抗体形成減少スルノ事實ハ諸家ノ實驗ニ於テ已ニ一致スル所ナリト雖モ只ダ一回「あるこほる」ヲ抗体原（アンチゲン）接種ノ直前又ハ直後ニ與フル場合ニハ其ノ成績大ニ齟齬シ或ハ抗体ノ形成多量ナルト唱ヘ或ハ何等ノ影響ナシト稱シ或ハ又抗体ノ形成減少スト唱フルモノアリテ一致セズ。

著者ハ其ノ疑点ニ考慮シ該問題ヲ家兎ニ就テ再査シ、次ノ結論ニ到達セリ。

一、「あるこほる」飲用ハ免疫上有害ニテ、一モ利アルヲ認メズ、即チ「あるこほる」ヲ服用スル時ハ爲メニ抗体ノ新生量減少シ又一度形成セラレタル抗体モ速ニ破壞セラレ又体外ニ排却セラル。

二、家兎ト人類トハ「あるこほる」ニ對スル關係異ナル点アリ、即チ人類ハ祖先ヨリ酒ヲ嗜好品トシテ飲用シ家兎ニハ「あるこほる」全ク由緣ナシ、從テ今茲ニ家兎ヨリ得タル成績ヲ以テ直チニ吾人人類ニモ斯クアルベシトハ斷言シ得ズ、然レモ本實驗ヲ參酌シ考フル時ハ人類ノ急性傳染病ニ「あるこほる」ヲ治療的ニ用フルハ一考ヲ要スベキモノナリ、勿論是レ唯ダ抗体形成量ニ關シテ說ヲナスノミ。（細菌學教室清水抄）

○膀胱炎患婦ノ尿ノ細菌學的檢査

（日本微生物學會雜誌第五卷一月號）

渡邊剛二

著者ハ膀胱炎婦三十五例ニ於テ「かてーてる」ヲ以テ直接膀胱ヨリ滅菌的ニ採取セル尿ニ就キ細菌學的檢索ヲ行ヒ陰性ニ終リシ二例ヲ除クノ外ハ每常細菌ヲ證明シ、就中普通大腸桿菌最モ多クシテ十六例、化膿菌之レニ次ギ十二例、苞菌六例、普通變形桿菌二例、緣膿菌二例、新菌（凝乳球菌）一例、ヲ證明セリ。而シテ尙ホ著者ハ以上ノ實驗ヨリシテ膀胱炎發病ノ誘因ガ何レナルヲ問ハズ、此等

細菌ハ膀胱炎ノ主原因若シクハ副原因トナリ以テ疾病ヲ難治タラシムモノナラント結論セリ。（細菌學教室清水抄）

○結核菌ニ對スル各種殺菌劑ノ殺菌作用ニ就テ

（Journ, of infect, Diseases, Vol, 15, P. 245.）

De Witt, Lydia M, and Sherman, Hope,

五・〇％ノ石炭酸溶液ハ結核菌ヲ五分内ニ死滅セシメ、其ノ一・〇％溶液モ殆ンド同作用ヲ有シ、〇・一％溶液ニ於テモ尚ホ一程度ノ殺菌的作用アリ。

「フォルムアルデヒード」ノ一・〇％溶液ハ一時間ニシテ、其ノ〇・一％溶液ハ二十四時間以内ニ「エチール、アルコホール」ノ二五・〇％溶液ハ一時間ニシテ結核菌ヲシテ死滅ニ陷ラシム。

「アツエトン」、「クロロフォルム」「エーテル」等ハ殆ンド作用ナキカ或ハ之レヲ有スルモ甚ダ微弱ナリ。

「トルオール」及ビ沃度ハ殺菌作用僅少ナリ。

昇汞ハ〇・〇〇一％溶液ハ二十四時内ニ、〇・一％溶液ハ一時間内ニ殺菌ス。

其他〇・〇〇五％溶液ノ鹽化金、〇・〇二五％溶液ノ硝酸銀、〇・一％ノ三チアン化金、及ビ五・〇％ノ鹽化銅溶液等ハ結核菌ヲ二十四時以内ニ死滅セシム。

結核菌ハ石炭酸、「フォルムアルデヒード」及ビ金屬鹽類ニ對シテハ葡萄狀球菌、連鎖狀球菌、肺炎球菌、淋球菌、及ビ窒扶斯菌、大腸菌等ヨリ感受性大ナレモ溶脂性物例ヘバ「アルコホール」、「クロロフォルム」、「エーテル」、「アツエトン」、「トルオール」及ビ沃度等ニ對シテハ感受性弱シ。

此レ恐ラクハ結核菌ノ脂肪含量ノ大ナルガ爲メナラン。

（細菌學教室清水抄）

○「モルモット」間ニ流行セル一「スピロヘーテ病ニ就テ（第一回報告）

（衛生學傳染病學雜誌第十二卷第五號）

醫學博士　芳我石雄
醫學士　吉澤惟雄
梅本英太郎
弘重壽輔

著者等ハ「モルモット」間ニ脫毛症ヲ起シ、漸次ニ衰弱シテ致死セシムル一種ノ傳染病アルヲ發見シ其ノ病原檢索ニ從事シ、該病「モルモット」二十二頭ノ内二十頭ノ血液中ヨリ、他ノ二頭ハ死亡後其ノ組織ヨリ一種ノ「スピロヘ

ーテ」ヲ發見シ、之レガ研究ヲ行ヒ、次ノ結論ヲ擧グ。

一、余等ノ發見セル「スピロヘーテ」ハ其ノ血液中ニ在ルモノハ短且ツ大ニシテライシマン、ロコノスキー氏法ニヨリ染色シタルモノニツキ測定シタルニ長サ一・四五乃至四・六五「ミクロン」幅〇・二五乃至〇・三「ミクロン」位ノ大サヲ有シ廻旋直徑〇・五ー〇・七「ミクロン」ヲ示ス。

廻旋數ハ種々ニシテ少ナキハ½乃至一廻旋ヨリ多キハ五ー六廻旋位迄ナリ。而シテ二ー三廻旋ノモノ最モ多シ。兩端或ハ一端「エンドフアーデン」ヲ有スルモノアリ。鞭膜ハ證明セズ、血球中ニ在ルモノヲ見ズ。

其ノ組織内ニ在ルモノハ一般ニ廻旋數多ク四ー五又ハ六廻旋ノモノ多キノミナラズ、又時ニ十廻旋ニ近ク從テ長サモ或ハ十「ミクロン」以上ニ達スルモノ稀ナラズ如斯ニシテ一見恰モ別種ノ如キ觀ヲ呈ス。

二、對照トシテ約六十頭ノ健康「モルモット」血液ヲ檢査セルニ一匹ノ該「スピロヘーテ」ヲ發見セズ、サレバ脫毛症ナキ「モルモット」ニ於テ自然的ニ「スピロヘーテ」來リ得ルトスルモ其ノ數ハ脫毛症ヲ有スルモノニ比シ極メテ僅少ナラザルベカラズ。

三、以上ノ事實ヨリ余等ノ發見セル「スピロヘーテ」ハ余等ノ以前不明ノ傳染性皮膚病トセル「モルモット」脫毛症ノ病原体トナスモ敢テ失當ニアラザルベキヲ信ズ、尙ホ余等ノ人工的ニ感染セシメタル「モルモット」ニ於テ脫毛症ヲ起スニ至レバ更ニ確實ナルモノアレ𪜈今日ニ於テハ日尙ホ淺クシテ、未ダ其ノ結果ヲ見ル能ハザルヲ遺憾トス。

四、余等ハ人工的ニ感染セシメタル「モルモット」ニ於テ其ノ血液中ニ無數ノ「スピロヘーテ」ヲ證明シ得タルニ關セズ、其ノ初期ニ於テハ何等脫毛ヲ起サザルヨリ考フレバ自然界ニ於テ本症ニ感染セル「モルモット」ニテモ感染ノ初メニ於テハ脫毛ナクシテ本「スピロヘーテ」ヲ血液中ニ證明シ得ルモノアルベキヤ明ナリ。

サレバ「モルモット」ヲ「スピロヘーテ」研究ノ試驗材料トシテ使用セントスルモノハ其ノ豫備試驗トシテ充分ノ注意ヲ以テ「スピロヘーテ」ノ存否ヲ檢査シ置クヲ要ス。

五、健康「モルモット」三頭ヲ七頭ノ罹患「モルモット」ト同棲セシメタルニ一頭ハ七日目ニ二頭ハ八日目ニ同型「スピロヘーテ」ノ出現ヲ證明シ其ノ解剖的所見亦罹患動物ト同樣ナルヲ見タリ、サレバ本症ハ「モルモット」間ニ感染シ易キ一種ノ傳染病タルヲ知ルヲ得ベシ。

六、本「スピロヘーテ」ハ其ノ形的性狀ニ於テ西洋ノ文獻ニテハ「スピロヘーテ、ラベラニー」ニ我國ノ文獻ニテハ二木博士石原學士ノ鼠咬症ノ病原体トセラルル「スピロヘーテ」ト極メテ相似タルモノナリ。

（細菌學教室清水抄）

○牛血清ニ就テ（第一回報告）

（日本微生物學會雜誌第五卷一月號）

藤原九十郎

著者ハ牛血清中ノ溶血性成分、膠着素（Konglutin）並ニ菌体免疫ニヨリテ生ゼル諸種ノ雙攝体等ニ就キ研究ニ從事シ、其ノ第一回報告トシテ牛血清中ニ於ケル溶血性補体及ビ特異物質タル溶血催進性物質ニ就キ論述セルモノニシテ其結論ハ左ノ如シ。

一、牛血清ハ山羊並ニ牛血球免疫雙攝体ニ對シ補体作用ヲ有セズ、是レ三個成分（抄錄者曰ク、補体ノ三個成分トハ中節〔ぐろぶりん屑ニ在ルモノ〕、末節〔あるぶみん屑ニ在ルモノ〕及ビ第三成分〔dritte Komponent〕ヲ指スモノナリ）中、末節ヲ殆ンド缺如スルニ因ス。

二、牛血清ハ山羊血球ニ對シ耐熱性ノ健常溶血素ヲ有スルモノニシテ牛血清ノミニテハ溶血反應ヲ呈セサルモ之レニ海猿血清（補体）又ハ單ニ其ノ末節ヲ加フル時ハ其ノ〇・一五ニテ强度ノ溶血現象ヲ顯ハス。

三、牛血清中ニハ溶血催進性物質存在ス、而シテ諸物質ハ一定度迄溶血價並ニ溶血單位ヲ高ムルモノナリ。換言スレバ完全溶血ニ必要トスル雙攝体量ヲ節減セシムルモノナリ。

四、牛血清中ニ存スル溶血催進物質ハ血清「ぐろぶりん」屑中ニ存在シ、非耐熱性ニシテ四十五度乃至五十度ニ三十分加温セバ容易ニ非働性トナルモ孵温中ニテ振盪スルモ其ノ作用ヲ失フコトナシ。

五、牛血清中ニ存スル溶血催進性物質ハ孰レノ免疫血清ニモ均シク作用スルモノニ非ズ、但シ牛免疫血清ニ對シテノミ其ノ作用ヲ呈スルモノナリヤ、即チ絶對的特異性ヲ有スルモノナリヤ否ヤニ關シテハ他日ノ研鑿ニヨリテ之レヲ闡明トセム。

六、牛血清中ニ存スル溶血催進性物質ハ溶血系中血球所帶ノ雙攝体ニ作用ス、換言スレバ雙攝体ノ對補体連結簇ニ於テ作用ス。

七、牛血清中ニ於ケル溶血催進性物質ハ補体ノ中節成分トハ甚シク酷似スト雖モ間接的ニ兩者ノ異ナレル物質ナルコトヲ推定スルニ難ラズ、而シテ化學的ニ兩者ヲ

區別スルコト能ハズ。（細菌學教室清水抄）

○赤痢菌ノ含水炭素及ビ蛋白質ニ對スル「フェルメント」作用ニ就テ

（細菌學雜誌第二百五十七號）

中楯幸吉

著者ハ著者氏ガ分離セル赤痢菌ノ二菌種ニ就テ左ノ實驗ヲ報告セリ。

一、從來ノ第二型菌ニ屬スル菌種ガ轉培シ行ク中ニ糖分解作用上第四型菌ニ變化セリ。

二、糞便ヨリ分離ノ當時ニ於テ凝集反應ヨリハ第四型菌ニ糖分解ノ上ニテハ第二型菌ノ性質ヲ呈セリ。

抄者曰フ甲菌種ノ變化ハ恐ラクハ變種ニシテ（通常變種ハ糖分解性ヲ失フ然カルニ著者ノ菌種ハ此反對ナリ奇ナリト謂フ可シ）乙ハ「ムタチオン」ト見ル可キモノナリ。

（細菌教室山中抄）

○「ワクシン」ノ作用及其効力

（活働性及受働性免疫ニ關スル實驗）

醫學博士　志賀潔

醫學士　矢部專之助

著者等ハ感作及加熱「ワクシン」ヲ以テ活働性及受働性免疫ニ關スル實驗ヲナセリ受働性試驗トシテ「ワクシン」ヲ注射セル兎ノ血清ヲトリ之ガ溶菌價ヲ試驗シ活働性免疫ヲ試驗スルニハ「ワクシン」ヲ「モルモット」ノ靜脈内ニ注射シ以テ其ノ吸収ニ遲速ノ差ナカラシメ然ル後一定ノ時間ヲ經テ「コレラ」菌ノ致死量ノ二倍乃至八倍ヲ「モルモット」ノ腹腔ニ注射シテ其ノ生死ヲ檢査シ次ノ如キ結論ヲ得タリ。

受働性免疫ニヨリテ生ゼシ溶菌素ノ發生ノ遲速ヲ見ルニ感作「コレラワクシン」ニアリテハ加熱「コレラワクシン」ヨリモ稍々速カナリ然レドモ差違ハ「ワクシン」ノ靜脈注射ニ於テハ著明ナレドモ皮下注射ニテハ證明スルコト能ハザリキ次ニ溶菌素發生ノ多少ニ至リテハ感作加熱兩種「ワクシン」ニ於テ著シキ差違ヲ見ズ或ハ感作「ワクシン」ニ於テ寧ロ弱キコトアリ。

活働性免疫ニアリテハ感作「ワクシン」ハ注射後六時間ニシテ既ニ明カニ免疫力ヲ發生セルニ反シ加熱「ワクシン」ニ於テハ此時未ダ著明ノ免疫性ヲ見ズ且ツ免疫性ノ發生力ハ兩者間到底差違ヲ認メ難ク致死量二倍ノ感染ニ於テハ寧ロ感作「ワクシン」ニ於テ生殘者多キヲ證セリ。

然ラバ即感作及加熱「ワクシン」ノ効力ハ比較スルニ感作「ワクシン」ニ在リテハ免疫力發生速カニシテ且ツ其ノ強

度劣ラズト云フヲ得ベシ。

感作「ワクシン」ハ加熱「ワクシン」ニ比シテ速カニ免疫ヲ發生セシメ且ツ其ノ免疫力毫モ劣ラザル所以ハ果シテ如何ナル作用ニ基クヤ之レ吾人ノ未ダ說明シ得ザル所ナリ或ハ感作「ワクシン」ハ血中ニ於テ溶解シ易スキニヨルヤ或ハ加熱「ワクシン」ハ加熱ノ爲メニ一部ノ免疫元ヲ喪失スルニ由ルヤ或ハ加熱ニヨリ全ク免疫元ノ性質ヲ變ズルニ由ルヤ未ダ卒ニ之ヲ斷言スルヲ得ズ。

終リニ著者等ハ述ベテ曰ク「ワクシン」注射ハ活働性免疫ヲ附與ス而シテ此免疫ノ本態ハ頗ル複雜ナルモノニシテ組織細胞ノ作用ヲ其ノ一トシ血清ノ作用ヲ其ノ二トス更ニ之ヲ詳論スル時ハ細胞ノ細菌ニ對スル喰菌又ハ其ノ他ノ抵抗作用ノ外細胞ノ細菌ニ向ツテ集合シ或ハ細菌ノ刺戟ニ由リ分裂增殖等ヲ營ミ以テ侵入シ來レル細菌ヲ減ゼズンバ止マザラントス余等ハ此ノ作用ヲ總括シテ細胞ノ一種ノ訓練ト名ヅケントス「ワクシン」注射ヲ受ケタル動物ノ血清ヲ採リテ其ノ免疫力ヲ試驗スルガ如キハ單ニ免疫性一部ノ證明ニ過ギザルナリ。（細菌學教室白石抄）

○海水ニ混ゼル「コレラ」菌ト鹹水魚トノ關係

（細菌學雜誌第二百五十七號）

壁島爲造

「コレラ」菌ト魚類トノ關係ハ既ニ高野、西龜、松本、猪木、犬桶氏等ニ依リテ實驗的ニ研究セラレ一定ノ結論ニ達セルガ著者ハ「コレラ」菌ヲ含有スル海水中ニ投ゼル鹹水魚汚染ノ程度乃至其消毒法並ニ「コレラ」菌ニ汚染セル魚肉ノ調理上ノ關係ヲ實驗的ニ研究シテ次ノ結論ヲ得タリ。

一、「コレラ」菌含有海水中ニ於テハ鹹水魚ハ其腸內ニ「コレラ」菌ノ侵入ヲ見ルコト多ク游泳時間ノ極メテ短キモノ―五分乃至十分―ニ於テモ既ニ其腸內ニ「コレラ」菌ヲ證明シ得ベシ。

二、「コレラ」菌含有海水中ニ投ゼル死魚ノ腸內ニモマタ「コレラ」菌ヲ認ムルコト多シ。

三、魚体ニ附着セル「コレラ」菌ハ消毒藥ニ對スル抵抗力ハ極メテ强シ。

四、魚腸內ニ侵入セル「コレラ」菌ハ縱令腹壁ヲ截開スルモ消毒藥ヲ以テ殺菌ノ目的ヲ達スルコト殆ンド不可能事タリ。

五、「コレラ」菌ニ汚染セル魚類ニシテ鹽漬トナシ八日以上經過セルモノハ腸內ノ「コレラ」菌モマタ死滅ス。

六、「コレラ」菌汚染ノ虞アル魚類ノ調理方ハ煮沸又ハ酢漬四時間ノ他ニ安全ナル方法ヲ見ズ。（細菌學教室丹抄）

眼科學

○乳兒先天黴毒性虹彩炎

（中央眼科醫報九卷三號）

增田隆

先天性黴毒兒ノ虹彩炎ヲ來ス者ハ吾人ガ臨床上ニ往々見ル所ナリ、著者ハ其九例ニ就テ患兒及兩親ノ既往歷ヲ記載シ、本症ハ母体ガ頻回ノ流產、死產或ハ早產ヲ經過シ、偶々生存スル嬰兒ヲ冒シ、生後數ヶ月以內ニ於テ發生スル者ニシテ、彼ノ小兒期又ハ少年期若クハ丁年期ニ至リテ發來スル先天黴毒ノ虹彩炎トハ、理論上同一ナルモ、乳兒ト成人トハ体質上大ナル差異アリ、從ツテ病原菌ニ對スル抵抗力ニ差アルヲ以テ、兩者ヲ區別スルハ臨床上妥當ナルヲ附言セリ、而シテ本症ノ特徵トシテ瞳孔內或ハ虹彩面ニ灰白色滲出物ヲ生シ、外觀上刺戟症狀ヲ呈セズ、虹彩炎ニ必發ノ角膜周擁充血ヲ缺如シ、他覺的ニ唯ダ炎性滲出物ノ現出ト血管新生ノ發來スルニ在リト雖モ滲出物ノ分量及部位ニ依リ、又血管新生ノ多少ニ依リ種々ノ外觀ヲ呈ス、普通最モ多キハ瞳孔緣次ニ大小虹彩輪ノ境界部ナリ、患兒ノ全身狀態ハ發育不良、筋肉羸瘦シ、皮膚菲薄軟弱ニシテ、皺壁ニ富ミ光澤ナシ、顏貌蒼白、体重輕ク、活力乏シク、叫聲ハ力ナク暫ニシテ嘶嗄ス、殆ンド必存ノ合併症ハ黴毒性鼻加答兒ニシテ、屢々皮疹ヲ合併ス、而シテ著者ハ九例中兩眼ヲ侵セル者八例ニシテ、只一例ノミ片眼ヲ侵セリ、其發現ハ生後三四ヶ月ニシテ、七ヶ月以後ハ皆無ナリ、又一例ニ於テハ脈絡膜炎ノ合併ヲ見タリト。（眼科教室加藤抄）

○鬱血乳頭ニ姑息的穿顱術ヲ行ヒタル一例ニ就テ

（眼科臨牀醫報第十二年第一號）

小口忠太

著者ハ先ヅ單簡ニ同手術ノ歷史並ビニ種類ヲ述ベ次ニ曰ク畢竟是等ノ手術ハ姑息的ナルモ一時腦壓ヲ減退シ因リテ乳頭ノ鬱血狀態ヲ去ラシメ以ツテ視神經消耗ノ危害ヲ除カント欲スルニ在リ故ニ腦腫瘍其ノ者ニ對シテハ効ナケレドモ視力ヲ保存シテ患者ノ不幸ヲ輕減シ得ベシ又已ニ減退セル視力ニ向ツテハ之ヲ回復スルノ効ナキヲ以テ手術ハ可及的早期ニ行ハザルベカラズト著者ノ一例即チ硬腦膜ヨリ生ジタル內皮細胞腫ニ來レル鬱血乳頭ニ穿顱術及腦室穿刺ヲ行ヒテ乳頭ノ症狀佳良ニ赴キ尙ホ死後剖檢シ得タル例ヲ報告セルモノニシテ患者ハ手術前ニ右○

三、左〇・五ノ視力ヲ有セルモノガ右側ニ於イテ矢狀縫合ノ下部顱頂ノ前部ニ於イテ五仙米平方ノ骨ヲ除去シ硬腦膜ヲ兩對角線ニ切開シ之レヲ飜轉シテ外側ニ縫合シ腦室穿刺ヲ行ヘ約四〇cc.ノ透明ナル漿液ヲ漏出セリ翌朝左上肢運動麻痺アリ後漸次眼底狀態佳良トナリ二回ノ腦穿刺ヲ經テ手術後一ケ月ニシテ殆ンド正常眼底ニナレリ視力ハ右〇・三左〇・六左ニ於イテ幾分ノ視力恢復ヲ見タルモ第四回穿刺後斃レタルモノナリトイフ本例ニ於イテハ穿顱ノ位置稍々後方ニ過ギタルタメ上肢次デ下肢ノ運動麻痺ヲ來シタリト雖モ臀血乳頭ニ對シテ好影響ヲ及ボシ失明ノ難ヲ逃ガレシメタルノミナラズ幾分ノ視力ヲ恢復セリ只ダ腫瘍發生ノ位置不幸ニシテ貴要ナル中樞及神經ノ存在スル附近ナリシガタメ死ノ轉歸ヲ取リタリト雖モ手術ノ目的ハ充分ニ達スルコトヲ得タルモノナリト結ビ尙ホ此ノ如キ症例ニ於イテハ熟練ナル外科醫ノ手ヲ借ルベキモノニシテ眼科外科及神經科協力シテ所置スルヲ至當トスト附言セラレタリ。（眼科教室大城抄）

○特發夜盲症並ニ結膜乾燥症原因ニ於テ

（醫學中央雜誌第二百四十七號）

石原忍

夜盲症ヲ伴フ結膜乾燥症及角膜軟化症ニ對シ肝油ガ特異ノ作用ヲ有スルハ我邦刀圭者ノ偏ク知ル所ナリ然ルニ歐米ノ成書ニ唯フックスノ夜盲ノ條下ニ僅ニ一言セルト且フォッシウスガ森氏ノ著書ヲ引用シテ記載セルノミ然ルニ石原氏ハ古來我邦ニ於テ鰻及やつめうなぎガ夜盲症ノ特効藥トシテ賞用セラルルニ思ヒ及ビ該病患者ノ血液ヲ攝集シ須藤、隈川氏法ニ依リ血中ノ脂肪含量ヲ化學的ニ定量セリ其成績次ノ如シ。

第一例　一週間前ヨリ夜盲症ヲ訴ヘル者

	第一回採血時	第二回肝油服用後四日
脂肪(%)	〇・二〇六	〇・二七〇

第二例

	第一回採血時	第二回肝油服用後七日
脂肪(%)	〇・二三〇	〇・二八二

以上定量ノ結果羅病時ニ於テ血中ノ脂肪量ハ健康時ニ比シ若干減少シ尙肝油服用ニ依テ增加セルコトヲ證セリ氏ハ又脂肪ガ果シテ夜盲症ニ對シテ特効ヲ有スルヤ否ヤヲ實驗的ニ十二名ノ患者ニ脂肪ノ內服又ハ注射シテ光神變移ノ狀態ヲフォルステル氏光神計ヲ以テ精査測定セリ即チ肝油ヲ十瓦乃至十五瓦ヲ頓服セシメタル五例ハ一日乃至二日ノ後光神力平常ニ復シ鰻油ヲ五瓦乃至十瓦連日服

用セシメタル小兒ノ二例ニ於テ四日乃至五日ニシテ全癒シやつめうなぎノ油ヲ五瓦頓服セシメタル十歳ノ男子ハ翌日輕快シ鰯油十五瓦乃至二十瓦連用セシメタル患者ハ約七日ニシテ治癒セリ猶おれーふ油ノ内服又ハ皮下注射セシ三例ハ光神力次第ニ輕快セシモ前記脂肪類ノ速効アルニ及ハザルコト遙ニ遠シ、コトニ結膜乾燥症ニ對シテハ何等ノ著効ヲ認メザリシト、氏ハコレ全ク該脂肪ノ吸収難易ニ原因スルナラント言ヘリ。

夜盲症及結膜乾燥症ハ全身營養障害即チ營養不足下痢症肝臓病者飯酒家ノ胃加答兒ヲ起セルモノ及悪疫質者ヲ襲ヒ時ニ飢饉時ニ又ハ遠洋航海者食料不足ノ節流行性ニ來ルコトアリ本症ハコトニ小兒期ニ兒童ニ進擊スルコト多ク結膜乾燥症ヨリ進ンデ角膜軟化症ニ陷ラシメ遂ニ失明セシムルモノ實ニ七八歳小兒期失明者ノ首位ヲ占ムト云フ、特ニ人乳不足時穀粉ヲ以テ代用品トスル古習ヲ有スル我邦ニ於テコトニ牛乳煉乳等ノ代用品ヲ得難キ村落ニ於テソノ甚シキヲ見ル。

結膜乾燥症ノ際存スル一ツノ面白キ現象ハカク石原氏ハ血中脂肪含量減少ヲ定量的ニ證明セルニ係ハラズ結膜ノ組織的檢査ニ於テレーベル、バース等ハ共ニ上皮細胞中脂肪粒ヲ見且ツ又上皮細胞内ニ空胞ヲ存スト稱スルコトナリ、即チ以上上皮内ノ脂肪粒ト空胞トヲ總括シテ考フルニ脂肪粒ハ全身營養碍害ノ爲メ細胞内ニ攝収シタル含水炭素並ニ脂肪ヨリ脂肪變性ニ依リテ生ジタルモノナル可ク空胞ハソノ脂肪變性ニテ生ジタル脂肪ガ再ビ血中ニ吸収サレタルモノカ然ラザレバ組織檢査ノ爲メ行フ操作中脂肪溶解藥ノ爲メニ溶解サレタルモノカ二者幾レカニ屬スルナル可ク抄者ハ恐ラクハ前者ニ原因スルモノナランカト思考ス學兄諸彦幸ニ御指教アラバ抄者ノ以テ幸福トスル所ナリ。（眼科教室稲尾抄）

○「トラホーム」ノ病理解剖學補遺

（鹿兒島縣醫學會雜誌第二十三號）

樋渡一夫

明治四十三年ノ春、大阪ニ於テ恩師故水尾教諭ヨリ「トラホーム」ノ病理學的研究ナル問題ヲ貰ヒシハ、市川清氏ガ日本眼科學會ニ於テ「トラホーム」ノ本態論ニ就テ演述シ顆粒非本態論ヲ唱ヘショリ一ケ月ヲ經タル時ノコトナリシ、翌年市川氏ハ再ビ同題ヲ掲ゲテ演說シ水尾教諭ノ顆粒本態論トノ間ニ大ナル討論アリタリ、余ハ此問題ヲ貰ヒショリ同教諭ノ教室ニテ「トラホーム」ヲ研究スルコト四ケ年ナリシモ、得ル處ハ常ニ斷片的ノモノニシテ

世ニ發表スル程ノモノハ少ナカリキ、大正二年五月突然水尾師ノ急死ニ遭ヒシ余ハ其後本研究ヲ續行スルノ勇氣ヲ失ヒ居タリシガ昨年一月感ズル所アリ、曾テ水尾師ヨリ授カリシ研究方針ハ一時之ヲ措クコトトシ別ニ自ラ考案スル所アリ、生理的結膜ノ檢索ヨリ始メテ「トラホーム」組織ニ及ビ參考トシテ家畜ノ結膜、人間ノ扁桃腺及ビ蟲樣突起ヲ研究シ、其結果敢テ一家言ヲナサントノ決心ヲ起セルハ昨年十一月ノ始メナリキ、依テ十一月二十五日福岡ニ往キ九州醫科大學眼科教室ニテ開カレタル九州醫學會眼科部及ビ福岡眼科學會合同席上ニテ余ノ得タル成績ノ概要ヲ報告スルコトニセリ左ニ掲グル所ノモノ即チ其自家抄錄ニシテ堤氏編輯ノ眼科臨床醫報第十二卷第二號ノ載スル所ナリ、余ノ得タル結果ガ故水尾師ノ抱キシ意見ニ遠カリテ却テ市川氏ノ意見ト同一ノモノニ歸着セルハ余モ意外トスル所ナリ、余ハ今ニ尙ホ研究ヲ續行シツツアリ、總テノ成績ハ近ク著述トシテ發表セント欲ス、余ハ是迄鹿兒島縣醫學會並ニ市醫學會ニ於テ「トラホーム」ニ關シ演說ヲナシタルコト屢々アリ、此ノ關係ニヨリ今玆ニ之レヲ轉載シテ曾テ靜聽ヲ煩ハセシ諸君ノ一讀ニ供シ置カントスト云爾。

人間ノ眼瞼結膜ニ於テ正常的ニ顯微鏡的ノ淋巴小結節ガ存在スルコトハハンス、キルヒヨウ氏ノ精密ナル研究ニヨリテ明ラカナリ、余亦肉眼的ニ何等ノ病變ナク全ク健康ト認ムベキ眼瞼結膜ヲ檢査シテ、顯微鏡的ニ淋巴小結節ノ存在ヲ發見シ、能クハンス、キルヒヨウ氏ノ所見ヲ證明スルコトヲ得タリ、是レト同時ニ特ニ注意シ置カントスルハ健康結膜ノ上皮下組織內ニ於テ（キルヒヨウ氏ハ人ノ腺樣層ト謂フヲ非難シ自ラハ固有膜ト云ヘリ）「メチールグルユン、ヒロニン」ニ好ク染色スル處ノ「プラスマ」ヲ富有スル細胞ノ多數ニ存在スルコト是ナリ、此二者ハ結膜疾患ノ病理學ヲ研究セントスルモノノ豫メ能ク記憶シ措カザルベカラザル緊要事ナリ。

余ノ研究セル結果ニ依レバ「トラホーム」並ニ「トラホーム」以外ノ善性臚胞症等ニ於テ發生スル顆粒（臚胞）ハ右ニ述ベタル淋巴小節ノ肥大セルモノナリ、從來ノ學者ガ認メテ初發顆粒トナセルモノハ此淋巴小結節ノ未ダ肥大セザルモノ或ハ僅カニ肥大セルモノニテ內部ニ於ケル淋巴細胞ノ未ダ變態セザルモノ或ハ僅カニ變態セサルモノヲ名ヅケタルモノト思フ、諸家ノ記述セル顆粒初發ノ狀況ナルモノハ空想ニ過ギズ、淋巴細胞ノ一箇二箇三箇四箇ト重サナリ殖エ行ク所ヲ見タル譯ニアラザルナリ。

余ハ肥大セル扁桃腺組織並ニ炎症ニ罹レル蟲樣突起ヲ檢

査シテ其中ニ「トラホーム」顆粒ト同一ノ構造ヲ呈セル淋巴結節ヲ發見セリ「トラホーム」其他ノ場合ニ結膜ニ發生セル顆粒(臚胞)ノ中ニ存在スル小體包有細胞即チ喰細胞ハ右二者ノ淋巴結節中ニモ存在ス、角田隆氏ニ從ヘバ此細胞ハ血管壁ヨリ發生シテ防護ノ働キヲナスモノナラント云フ。

「トラホーム」顆粒ガ健康組織ニ既ニ存在スル淋巴小結節ノ肥大セルモノニ相違ナシト認メラルル特異ナル點ハ生理的ノ淋巴結節並ビニ「トラホーム」性顆粒善性臚胞共ニ自己ヲ被覆スル上皮細胞層ヲ通シテ淋巴細胞ヲ送リ出スコト是ナリ、唯ダ生理的ノモノニ於テ其數ノ著シク少ナクシテ「トラホーム」等ノ場合ニ著シク多數ナルノ差アルヲ認ムルノミ、此送リ出サルル淋巴細胞ハ從來上皮細胞層中ニ於ケル淋巴細胞浸潤ト認メヲレ又記載セラレタルモノナリ、而シテ如何ニ深ク位スル「トラホーム」顆粒ト雖モ必ズ其淋巴細胞ヲ深ク灣入セル結膜溝又ハ皺襞内ニ送リ出サザルモノナシ。

「トラホーム」ハ眼瞼結膜ノミナラズ一方ニ眼瞼軟骨及ビ眼瞼緣部皮下組織ヲ侵カシ、他方ニ球結膜ヲ經過シテ角膜内ニ及ビ「パンヌス」ヲ惹キ起ス、而シテ以上五個所ニ於テ共通ニ認メラルル病變ハ軈テハ瘢痕形成ニ導ク慢性成形炎症ナリ、眼瞼結膜ニ於テ顆粒ヲ發生スルハ此處ニ生理的ニ淋巴小結節ノ存在スルガ爲メナリ顆粒以外ノ病變即上皮膚下組織内ニ發現スル病變ハ、多數ノ「プラスマ」反應ヲ呈スル細胞(此中ニハマルシヤルコー氏型「プラスマ」細胞、幼若結締織形成細胞、清野氏ノ組織球細胞ヲ含ムベシ)結締織細胞ノ增殖其他僅少ノ淋巴細胞白血球等ノ浸潤是レナリ、是等ノ病變ハ球結膜ニモ軟骨組織内ニモ瞼緣皮下ニモ角膜内ニモ認ム、眼瞼結膜球結膜、軟骨内、緣部皮下等ニ於テハ生理的ニ既ニ多少ノ「プラスマ」細胞存在スルヲ以テ其增殖ヲ起スルモノト思ハルルモ、角膜内ニ於テハ健常ノ狀態ニ於テハ「プラスマ」細胞ヲ存セザルヲ以テ此處ニハ新タニ發現セルモノナルコト勿論ナリ、此點ヨリ論ズレバ「トラホーム」性病變ハ角膜内ニ於ケルモノヲ以テ最モ特異純精ナルモノト認ムルヲ得ベシ、市川博士ガ角膜「パンヌス」ノ病變ヲ以テ「トラホーム」ノ本態的變化ト認ムル所說ハ、其研究ノ方法ハ間接ナリト雖モ其得タル結果ハ純精ニシテ能ク本理ニ叶ヘルモノト認ムベシ。

球結膜角膜「パンヌス」軟骨内等ニ「トラホーム」顆粒ヲ發見セリト云フモノアレドモ、ソレガ眞ニ「トラホーム」性顆粒タルノ構造ヲ有セルモノナルヤハ疑ハシ、顆粒ガ上

皮細胞層ヲ通シテ淋巴細胞ヲ送リ出ス處ヲ見タルモノニアラザルナリ、皆ナ單ニ淋巴細胞ノ集團塊ヲ認メテ認定セルモノナリ。

半月狀襞ニ於テ「トラホーム」顆粒ヲ發生スルハ生理的ニ此處ニ淋巴小結節ノ存在スルガ故ナリ、動物ノ第三眼瞼ニテハ結膜中最モ多ク此處ニ淋巴結節ヲ有ス。

顆粒ハ眼瞼結膜領域半月襞領域内ヲ越エテ發生スルコトナシ、是レ臨床上ニモ病理解剖學上ニモ甚ダ著明ナル事實ナリ。

余ハ顆粒ノ瘢痕組織ニ變化スル處ヲ認メ得ザリキ、顆粒ガ瘢痕組織ニ變化スト云フモノアルモ余ノ所見ニヨレバ顆粒消失シテ瘢痕組織之ニ代ハルヲ認ム。

余ハ余ガ病理解剖學上ノ研究成績ニヨリ、市川博士ノ共ニ慢性成形性炎症ヲ以テ「トラホーム」ノ本態的變化ト認ムルモノナリ。而シテ「トラホーム」ハ通常眼瞼結膜内ニ初發シ、此處ヨリ連絡的ニ一方ニハ軟骨内ヘ、瞼緣部ノ皮下ヘ、他方ニハ球結膜ヲ經過シテ角膜内ニ及ブ。

臨床上「トラホーム」ノ終期ト認メラルル瘢痕形成ハ病理學上ニ於ケル右ノ慢性成性炎ノ結果ナリ。

（眼科教室高安寫抄）

外科學

○關節結核及結核性流注膿瘍治療ニ就テノ注意

（實驗醫報第三年第二十八號）

醫學博士　住田正雄

關節結核ヤ流注膿瘍ニ手術ヲ施コシテモ其ノ結果ガ餘リ良好デナイノデ多クノ醫者ハ之ニ敬遠主義ヲ取ッテ居ル。併シ手術ノ結果良好デナイノハ畢竟術者ノ不注意ニ因スルモノデ、手術時及其後ノ治療期間ニ於テ萬幅ノ注意ヲ拂ヘバ全治決シテ困難ニアラズ。

注意スベキ必要條件トシテハ、手術時及後療法中絶對ニ無腐防腐的ニ處置スルコト、手術ト同時ニ全身療法ヲ加フルコト、局所ヲ絶對ニ安靜ニ保持スルコト、結核ノ特効藥タル沃度仿謨ヲ充分ニ使用スルコトデアル。

結核性關節又ハ骨病竈殊ニ流注膿瘍ノ手術ノ際ニハ、腹腔乃至腦脊髓ノ手術ト同樣又ハ夫レ以上ニ充分防腐法ニ留意スルヲ要ス。乃チ結核性病變アル周圍組織ハ抵抗少ナク化膿シ易キガ故ニ絶對的無腐防腐ノ原則ニ從ハザルベカラズ。

要スルニ結核性病竈ノ全治困難ナルハ以上ノ注意ヲ怠ル爲メニシテ、上述ノ如ク病竈ヨリ充分病的產生物ヲ除キ全然無腐的ニ處置シ、同時ニ沃度仿謨ヲ適當ニ應用スレバ、局所ノ安靜ト全身狀態ノ注意トニ由リ通常無腐的經過ヲ取リ完全ニ治癒スルモノデアル。

尙附言スベキハ、一體結核性ノ病的產生物ヲ結核膿汁等ト言ヒ所謂創傷傳染上最モ恐ルベキ化膿菌ニ由レル膿汁ニ類似ノ名ヲ用ユル爲メ、自然此レガ取扱ニ關シ無腐防腐ノ注意ヲ怠ラシムルコトガアル。例ヘバ地方ノ非專門醫者ニ取扱ハレタル結核性流注膿瘍ガ屢々不注意ニ切開サレ、甚ダシキハ「ガーゼタンポン」又ハ「ゴム」管等ヲ施セル等ノ誤リハ畢竟結核性膿汁ト言フ不適當ナル名稱ガ自然無腐防腐ノ注意ヲ忘レシメタル爲メデアル。換言スレバ結核性膿瘍トカ膿汁トカ云フ名ハ、創傷經過ニ對シ何等ノ意味ナキ詞ニシテ決シテ之ヲ以テ多少ナリトモ所謂化膿菌ニ因スル膿汁等ニ近キ考ヲ起シテハナラヌ。

（外科教室高桑抄）

○腹水ニ對スル種々ナル持續排液法ノ價値ニ就テ

（東京醫事新誌第二〇一〇號）

醫學士　緒方祐得

著者ハ、腹水ニ對スル諸種ノ治療法中、持續排液法ニ關スルモノ、概其研究尙ホ不充分ナルヲ以テ、該研究ヲナシ、其眞價ヲ明カニセント欲シ、今日マデ試ミラレシ諸方法、及著者ノ考案セル二三ノ方法ニ付キ、動物試驗ヲ行ヒ、且ツ伊藤教授ノ「くりにっく」ニ於ケル諸例及諸家ノ報告セル臨床的所見ニヨリテ、斷定ヲ下セリ、即チ著者ハ硝子扣鈕、彎曲銀線、護謨管、護謨コンドーム、銀管及ビ絹絲等ノ異物ヲ以テセル腹水持續排液法ハ、異物ノ種類ニヨリ、多少ノ差異アリシモ、要スルニ手術創新鮮ニシテ、使用セル異物排液管ノ結締織膜ニテ被覆セラレザル期間ニ於テハ、腹水ヲ皮下組織內ニ導ク力强大ナルモ、後チ反應性炎症起リ、瘢痕組織囊ノ形成セラルルニ從ヒ、漸次排液作用減ジ、遂ニ全ク停止スルニ至ル。故ニ排液管ノ効ヲ奏スルハ、手術後短時日ノ間ノミ、次デ氣管食道管及血管等ノ自家、同種或ハ異種體ヨリ摘出セル組織ヲ以テ、動物ニ施セル腹水持續排液法、其他大網ノ皮下固定或ハ腹水ヲ直接血管內ニ輸送シ、以テ持續排液ヲ試ムル等セシモ、大體ニ於テ、前記異物ヲ使用セル者ト、殆ド同一ノ運命ヲ取レリトテ、各之ヲ詳論シテ、次ノ如ク結論セリ。

之ヲ要スルニ、今日迄試ミラレタル腹水ノ持續排液法ノ

効果ハ、凡テ一時的ニシテ、永久的ニ持續セズ、唯其有効期間ニ長短ノ差アルノミ。短キハ數日ニシテ、長クトモ數月ニ亘ルモノナシ。腹水ヲ排除スベキ場所トシテハ、皮下組織ヲ選ブヲ危險最モ少ナシトナス。而シテ家兎ノ新鮮ナル、或ハ保存セラレタル氣管ニテ排液管ヲ形成スルモノニ在リテ其成績最モ良好ニシテ、硝子扣鈕及ビ銀管ヲ使用スルモノ之ニ次ギ、爾餘ノモノハ何レモ不良ナリト。（外科教室近藤抄）

○壓迫療法ニ依ル膝腘窩動脈瘤ノ治驗一例

（臨床醫學第五年第四號）

醫學博士　廣川和一

著者ハ四十九歳ノ男子ニテ大酒家而モ黴毒ノ已往症アル患者ノ左膝腘窩ニ發生セル鵞卵大ノ動脈瘤ニ壓迫療法ヲ試ミント欲シ、自家考案ニ成レル動脈瘤壓迫器ヲ製作シ、輸入動脈タル左股動脈ニ壓迫ヲ施セリ。先ヅ圓ノ八分一ヅツノ廻轉ニテ徐々ニ壓ヲ加ヘ動脈瘤ノ搏動ヲ手ニ觸レザルヲ程度トシ、壓迫器ヲ脱スルニ際シテモ徐々ニ八分圓ヅツ緩メタリ。斯ノ如キ方法ノ下ニ患肢ノ擧上安靜ヲ命ジオキ、始メハ毎時（但シ睡眠時ヲ除ク）十五分間ヅツ十日間、次ハ十日毎ニ五分ヅツヲ增加シ、最後ノ十日間ハ四十分間ノ壓ヲ加ヘタリ。然ルニ經過中動脈瘤ノ搏動ハ漸次薄弱トナリ、該療法施行後四十六日ニシテ搏動全ク止ミ、雜音ヲ聽取シエザルニ至リ、他ノ症狀モ自ラ消退シ良好ナル成績ヲ擧ゲタリ。而シテ著者ハ治驗唯一例ニ過ギザルモ、該療法ハ患者ニ何等ノ苦痛ヲ與ヘルコトナク、僅カニ壓迫ノ際趾先ノ冷却ト麻痺トヲ感セシムルノミニテ、動脈瘤ノ觀血的手術ヲ行フ以前ニ一度ハ必ズ本療法ヲ試ムベキコトヲ推奬セリ。（外科教室高桑抄）

○胃ノ原發性肉腫ニ就テ

（東京醫事新誌第二〇一二—二〇一三號）

九洲帝國大學三宅外科助手
醫學士　王川一夫

著者ハ九州帝國大學三宅外科ニ於テ手術セラレタル原發性胃肉腫患者ノ三例ヲ擧ゲ、本病ノ臨床的所見ヲ開陳セリ。曰ク、胃ニ發生セル腫瘍ニ遭遇スレバ、先ヅ指ヲ胃癌ニ屈スルヲ正當トス。腫瘍中良性ノモノハ、臨床上ノ價値少ケレドモ、肉腫ハ殆ンド癌腫ト誤診サレ易キヲ以テ、之ト鑑別スルヲ要ス。肉腫ハ胃癌ニ比シ、三宅外科ニ於テ最近十二年間ノ實見ニヨリ算出セル所ニヨレバ、

○五%ニシテ、シャート、レキセル氏等ノ統計ニ一致シ、極メテ稀ナリ。

年齢ハ諸家ノ意見一致シ、胃癌ハ四十歳以下ノ人ニハ僅カニ一割乃至二割ナルニ對シ、肉腫ハ四割以上ヲ占ムト云フニアレド、氏ノ三例ニ於ケル如ク、四十歳以上ノ人ニ往々來ルコトアルヲ以テ、年齢ハ兩腫瘍ノ鑑別上有力ナル根據タルヲ得ズトナセリ。

性ハ、男女ニ於テ大差ナシ。

原因。　胃瘤ニ於ケル如ク、多クハ不明ナリ。

分類。　氏ハバーゴード氏ノ如ク、次ノ二種類ニ分ツ事ニ賛成セリ。

一、胃壁自己ヲ犯スモノ(胃ノ内腔ニ腫大スル者ヲ含ム)。

二、胃ノ外方ニ腫大スルモノ。

位置。　胃ノ何レノ部分ニモ來リ得ベケレド、幽門部及ビ大彎ニ最モ多ク、各二割以上ヲ占メ、後壁及小彎之ニ次グ。又屢々廣汎ナル區域ニ增大スル事アリト云フ。

原發部位。　胃ノ各層ヨリ發生シ得ル事勿論ナレドモ、其ノ半數以上ハ粘膜下組織ヨリ原發スルモノノ如シ。然ルニモ拘ワラズ胃ノ粘膜ヲ浸潤崩壞スル性質ハ、胃癌ノ如ク大ナラザル事、幽門部ニ多ク發生スルニ拘ラズ、幽門狹窄ヲ來ス事胃癌ノ如ク甚シカラザル事ハ興味アル兩者ノ鑑別点ナリ。

組織的觀察。　圓形細胞肉腫ニ屬スルモノ最モ多ク、約四割ヲ占ム。紡錘形細胞纖維肉腫及筋肉腫ハ少ク、一割内外ナリ。就中圓形細胞ニ屬スルモノハ、瀰蔓性ナル事多ク、紡錘形細胞肉腫ニ屬スルモノ限極性ナル事多シト。

轉移。　淋巴腺ノ轉移最モ多シ。血液性及接植性轉移モアリ。

症狀。　胃ノ外部ニ腫大スルモノ、殊ニ有莖肉腫ニ在リテハ、腫瘍以外ノ胃症ナク、偶々之レアルモ輕微ナリ。胃壁自己ヲ犯ス者或ハ胃ノ内方ニ向テ腫大スル者ニ在リテハ、症狀胃癌ニ類似ス。唯腫瘍以外ノ自覺的及他覺的症狀ハ、胃癌ニ比シテ其發現遲ク且ツ輕微ナリ。

治療。　早期切除ヲ賞揚ス。其ノ永久的成績ハ、胃癌ニ劣ラズ。(外科教室井出抄)

皮膚科及泌尿器科學

○リンゲル氏液及自家血液ヲ以テスル癢痒性皮膚病療法

(Dermatolog. Wochenschrift. Nr. 45. & 46. 1914.)

フリツルックス

著者ハ先ヅ外科ガ疼痛ト戰フガ如ク恰モ皮膚科ニ於テハ止痒法ニ對シテ大ナル苦心ヲ拂ハザルベカラザルヲ說キ最近迄試ミラレタル幾多ノ瘙痒療法ヲ述ベ曩ニザーリ及ロイベ氏等ガ食鹽水ノ注射ニヨリ即臟器洗淨 Organismus-auswaschung ヲ行ヒ特殊ノ毒素ヲ排除シ得タル實驗ト婦人科醫フロインド及ホール氏等ノ試ミタル姙娠中毒症ニ對スル血淸療法トニ着目シ、皮膚ノ瘙痒ガ血液、淋巴液ノ鬱滯、又ハ自家中毒ニ原因スト云フ說ニ對シテ前述ノ療法ヲ試ミタルナリ。著者ハ蕁麻疹ヲ有スル一婦人ニ健康ノ夫ヨリ血液ヲ得テ二十立方仙迷ノ血淸ヲ患婦ノ靜脈內ニ注射シ更ニ一回同樣注射ヲ試ミシモ毫モ輕快セズ以來注射ヲ停止セリ、本法ハ患者以外ニ血淸供給者ヲ要シ且ツ供給者ガ果シテ健康ナルヤ否ヤノ檢査ハ非常ニ煩雜ニシテ到底實地醫家ノ應用シ得ザル不利アルヲ知リシ故血淸ニ代用スルニリンゲル氏液（一「リートル」ノ殺菌蒸餾水ニ「クロールナトリウム」九·五、「クロールカリウム」〇·二、「クロールカルチウム」〇·二及重炭酸「ナトリウム」〇·六ヲ溶解セル液）ヲ注射スル事トシ十例ノ瘙痒性皮膚病患者ニ試タル結果好成績ヲ示シ唯不結果ニ終リタルハ二三例ニ過ギズ、ソノ注射法トシテ、新鮮ニシテ無菌的ノリンゲル氏液約百乃至三百立方仙迷ヲ先キニ肘靜脈ヨリ二十乃至百立方仙迷ノ血液ヲ採取シタル後ヘ「サルバルサン」溶液ヲ注射スルガ如ク注射ス、二三回反覆スルモ副症狀ハ輕微ニシテ輕キ惡寒及熱ハ三十八度二分以上ニ上昇シタル事ナク尿ハ常ニ無蛋白ナリキト。

次デ著者ハ三人ノ小兒ニ母ヨリ採血シテ臀筋內ニ注射セシガ良果ヲ得尙數例ノ患者ニ自家血液ヲ採取シテ注射ヲ試タル處不結果ニ終リタルハ四例アルノミ殊ニ全身性皮膚瘙痒症、瘙痒性濕疹、蕁麻疹樣苔蘚及蕁麻疹等ニハ奏効セリト、ソノ注射法ハ簡單ニシテ患者ノ肘靜脈ヨリ無菌的ニ二十乃至三十立方仙迷ノ血液ヲ採取シ直チニ臀筋內ニ注射ス、副症狀トシテ、アル患者ハ多少ノ腦症狀ヲ呈セシモ次回注射ニアリテハ起スニ至ラズ注射部位ノ疼痛ハ輕微ニシテ翌日ニ至レバ消失スルヲ常トス。以上ノリンゲル氏液及ビ自家血液ノ注射ニヨル治癒的原因ニ就テハ各種ニ考ヘ得ルモ要スルニ不明ニシテソノ疾患ニ對シテ瘙痒ニハ特有ナル作用アルモノナラント述ベ、約言シテ効果アリシモノハ皮膚瘙痒症、蕁麻疹、蕁麻疹樣苔蘚、瘙痒性濕疹、焦性沒食子酸皮膚炎ニシテ不結果ニ終リシモノハ菌狀息肉症、疱疹狀皮膚炎、瀰爛性濕疹ナリキト。

（皮膚科教室布施抄）

○攝護腺肥大症ニ就テ

（臨床醫學第五年第一號）

醫學士　保々輝雄

古來泰西ノ識者ニヨリ研鑽セラレ、其本態及病理等ニ關スル報告ノ多キニ拘ハラズ、未ダ尚之ガ定說ヲ見ルニ至ラズ、殊ニ我ガ日本人ニ於テハ稀有ナルモノト認メラル、著者ハ本症ノ三例ニ就テ病歷及組織的檢査ヲ列敍シ、本症ハ果シテ本邦人ニ尠キカ、且其由來スル所因ヲ追究シ以テ左ノ結論ヲナシタリ即チ攝護腺肥大ハ本邦ニ於テハ比較的稀有ナル疾患ナルガ如シ、主要ナル組織的ノ變化ハ、尋常攝護腺ニ見ル處ノ腺細胞及結締筋組織ノ增殖ニシテ、攝護腺肥大ハ一種ノ腺腫樣「ヒーペルプラジー」ト見做ス可キモノナリ、圓形細胞浸潤並ニ腺細胞脫落ノ如キ炎症性變化ハ續發性ノモノト見ルヲ至當トス、尿道腺副尿道腺原發說ハ未俄ニ信ジ難シ、勿論是等ノ腺組織ヨリ腫瘍ヲ新生スルコトハ理論上不可能ニアラザルモ今日文獻乃至成書ニ記載セラルルガ如キ所謂攝護腺肥大症ナルモノハ攝護腺自己ヨリ原發セルモノナル可シト信ズ、本症ノ原因ニ關シ動脈硬化症說、炎症說、眞性腫瘍說等アルモ「ホルモン」說ハ最眞ニ近カランカ本症ガ泰西人ニ多クシテ本邦人ニ少キ理由亦之レニヨリテ說明スルヲ得可シ、治療法トシテ種々ノ對症療法アルモ根治的ニ攝護腺ヲ截除スルヲ優レリトナス而シテフレーヤー氏法蓋最良法ナル可シ、手術ニ際シ注意スベキハ尿ノ黴菌ニ感染セザルコトニシテ既ニ感染セルモノニアリテハ術後膀胱內ニ尿ノ停滯セザル樣工夫センコトヲ要ス而シテ耻骨縫際上式ニ於テモ會陰部ニ對孔ヲ造ルコト有効ナル可シ其タメニ生ズル瘻管ハ通常容易ニ閉鎖ス可キモノナリト。

（皮膚科教室布施抄）

○「レントゲン」管球ノ壽命ト破損ノ原因

（醫理學療法雜誌第五號）

東京電氣株式會社實驗室　藤井鐵也

著者ハ「レントゲン」管球ノ壽命ヲ定義シテ始テ使用シタル時ヨリ其ノ原因ノ如何ニ係ハラズ使用シ得ザルニ至ルマデノ使用時間ヲ稱シテ「レントゲン」管球ノ壽命トシ、壽命ヲ短縮セシムル主因ハ使用者ノ技術如何ニヨルトナシ、尙球內ノ瓦斯量ノ「レントゲン」線ノ電氣的性質ニ大關係ヲ有シ、シカモ瓦斯量ヲ一定スルニ非常ノ困難ナル事加フルニ調節器及管球內金屬ニ含有セル瓦斯又ハ硝子壁、金屬壁ニ附着セル瓦斯量ハ不定ナル事等ヨリシテ管

球ノ壽命ヲ豫定スルハ不可能ニ屬スト述べ。次ニ「レントゲン」管球破損ノ原因トシテ左ノ數項ヲ列シタリ即チ管球使用ニ由リ漸次硬度上昇シ終ニ調節器ノ用ヲナサズシテ管球使用シ能ハザルニ至ラシメ、取扱方ノ不注意ヨリ管球ヲ裂傷破損シ、調整器ノ調整ヲ誤リテ排氣不良ナラシメ、管球ニ過大ノ電流ヲ通セシ場合、使用中電氣ノ漏洩ヨリ管球ヲ損傷シ、使用中管球内硬度高クシテ外間放電ヨリ損傷スル場合、使用中或特殊ノ現象ニ由リテ一部ニ破損ヲ來ス場合例ヘバ感應「コイル」ヲ用フルトキ逆電流ニヨリ管球ヲ破損スル場合、及「アルミニウム」陰極ヲ包圍セル硝子壁ト陰極トノ間ニ放電スルコトアリ又ハ對陰極ヲ包圍スル硝子壁ト對陰極金屬トノ間ニ於テ放電現象ヲ呈スル等ノ場合ニヨリ管球ヲ破損スル原因トシテ詳述セリ。（皮膚科教室布施抄）

婦人科及産科學

○骨盤端位

（日本婦人科學會雜誌第拾貳卷第貳號）

塚原伊勢松

骨盤端位ハ、吾人ノ稀ニ相遇スル所ニシテ種々ノ合併症ヲ併ヒ易キノ故ヲ以テ古來産科醫ノ注意ヲ惹キシモノニシテ外國ニテハ、其ノ頻度、原因、豫後其他處置等ニ關スル研究報告甚ダ多シト雖モ本邦ニアリテハ未ダ斯ル業蹟アルヲ聞カズ。著者ハ明治四十一年一月ヨリ大正元年十二月ニ至ル五年間ノ東京帝國大學産科教室ニ於ケル分娩錄ニヨリ種々ノ方面ヨリ之レガ統計研究ヲナシ且ツ之レヲ歐洲諸家ノ成績ニ比較シテ次ノ如ク結論セリ。

一、東京帝國大學産科教室ニ於ケル骨盤位ノ頻度ハ六・七％ナリ（歐洲諸家ノ統計ニ比シ甚シク高率ナリ、之レヲ以テ直ニ日本ニ於ケル頻度トハ見做シ難シ）

二、骨盤端位ハ姙娠前半期ニ於テ比較的多ク其ノ末期ニ近ヅクニ從ヒテ頻度ヲ減ズ。

三、骨盤端位ノ原因ニ就キ最モ密接ノ關係アルハ骨盤ノ異常殊ニ狹窄骨盤ニシテ、其ノ他雙胎姙娠、羊水過多、前置胎盤、未熟兒、及ビ畸形等モ亦誘因ノ一ナリ。

四、骨盤端位ハ腎臓障碍ヲ惹起スル事多ク、且ツ正位胎盤ノ早期及ビ前期剝離ヲ起スコト多シ。

五、骨盤端位ノ分娩經過ハ一般分娩ニ比シ遙カニ長ク七・二％ハ手術的逆娩ヲ要セリ然シテ胎兒ハ第二胎向ナルコト多ク早期及ビ前期ニ破水スルコト多シ。

六、母体ノ死亡率ハ〇・九八％ニシテ頭位ニ於ケルト大差

ナシト雖モ會陰破裂ヲ惹起スルコト遙ニ多シ、是レ蓋シ强制的粗暴ナル娩出術ニ由ルガ如シ。

七、胎兒ノ死亡率ハ二六・四％ナリト雖モ成熟兒二〇・四％早熟兒二九・六％ナリ然シテ男子ハ女子ニ比シ豫後良ナリ。

八、骨盤端位中比較的豫後佳良ナルハ臀位ニシテ不全足位之レニ次ギ完全足位最モ不良ナリ、然シテ此等豫後不良ナルハ主トシテ合併症ノ頻多ナルト、手術的介助ヲ要スル事多キトニ由ルナラン。

九、骨盤端位ナル事ヲ姙娠中ニ確診スレバ外回轉術ニヨリ頭蓋位トナスベシ。

十、骨盤端位分娩ニ際シテハ可及的自然逆娩ヲ期待スベシ從ツテ何等危險症狀ナキ間ハ自然經過ニ委スベシ、然シテ他方手術的操作ノ急ニ備ヘ、尙蘇生術ニ必要ナル準備ヲナシ、娩出ニ當リテハ粗暴ヲ避ケ、會陰保護ニ注意スベシ。（婦人科教室波々伯部抄）

○窒扶斯菌ニ因スル卵巢囊腫化膿ノ二例

（日本婦人科學會雜誌第拾貳卷第參號）

小島麟三

著者ハ朝鮮總督府醫院ニ於テ大正五年二月以降、遭遇セル摘出卵巢囊腫中、其ノ內容ノ細菌學的並ニ血淸學的檢索ニヨリ確實ニ窒扶斯菌ニヨルモノト斷定シ得ル二例ノ皮樣囊腫化膿ヲ報告セリ、然シテ該菌ノ囊內到達ハ血行ニ依ルモノナルベシト說ケリ。（婦人科教室波々伯部抄）

○初生兒出血性素質ノ療法

（Boston med. surg. Jaurn. 1915 juni 10.）

J. C. Hubbard.

初生兒出血性素質ノ療法トシテ人又ハ家兎血液ノ皮下注射ヲ有功トスレ𪜈其ノ移血法ノ効果大ナルニ如カズ、然レ𪜈初生兒靜脈管ハ多クハ纖細ニシテ上述ノ操作困難ナリ玆ニ於テ著者ハ該血液ノ直接腹腔內注入ヲ推奬セリ。

（婦人科教室波々伯部抄）

漫錄

○印度見聞記（其一）

川久保俊一（大正四年）

同君ハ本校卒業後東京回生病院ニ奉職中奮然印度及南洋見學ノ志ヲ起シ遂ニ日本郵船株式會社船醫ノ職ヲ利用シ大正五年四月ヨリ山形丸ニ乘組ミ本年二月歸朝ノ上其ノ職ヲ辭シ直ニ金澤病院小兒科ニ研究セラル茲ニ乞フテ彼地ノ狀況ヲ掲載スルコトトセリ、因ニ君ガ斯ノ如キ行ハ既ニ外人間ニ於テモ行ハルルトコロノ方法ニシテ醫士タル者ノ海外視察且見學ノ目的ニ向フテハ最モ便法タルヲ失ハズ、吾人ハ大ニ其ノ企圖ヲ贊スルモノナリ。（編者）

印度ハ悠久四千年以上ノ歷史ヲ有スル古國デアル、古來印度ナル名稱ハ世界ニ聞ヘテ居ルガソノ實体ハ神秘的デ憧憬的デシカモ解スルコトノ難ヒ謎デアル、然ルニ一部ノ印度研究者ヲ除ク外ハ日本人ホド印度ノ實情ニ暗ヒ國民ハナイ、同ジ東洋ニアリナガラ世界ノ謎タリ寶庫タル印度ヲ理解スルコト能ハズトセバ來ル可キ外交的及ビ經濟的關係上甚ダ不利ノ点多カラント思ヒ不遜ヲ顧ミズ僅二回ノ渡印ノ貧弱ナル經驗上ヨリ此ノ印度見聞記ガ生ジタノデアル。

印度、英國及ビ日本ノ關係。

印度ハ實ニ天然ノ寶庫デアル、單ニ英國ノ寶庫ノミナラズ世界ニ於ケル寶庫デアル、英國ハ近年ニ於テ毎年約三億萬圓ノ利益ヲ印度ヨリ本國ニ收メテヰル、英國ガ今回ノ大戰爭ニ既ニ數百億ノ軍資ヲ費シナガラ猶綽々トシテ餘裕ヲ示シ各國ヨリ富力ノ豫想外大ナルヲ感嘆サレテ居ルノハ英國ガ多年印度ノ寶庫カラ吸收シタ富ノ蓄積ニヨルコト亦決シテ尠クナイト思フノデアル、英國ハ地球表面約五分ノ一ノ領土ノ中ニ於テ經濟的及地理的ノ關係上印度ノ領有ガ殊ニ其大ヲ爲ス所以ノ樞軸デアル、故ニ英國ガ印度ヲ領有スルト否トハ東洋否世界ノ大勢ニ一大變動ヲ生ジ忽ニシテ英國國運ノ盛衰ニ關スルノデアル、即チ如何ニセバ印度ノ平和ヲ維持スルコトガ出來ルカハ實ニ英國政府及國民ノ一日モ頭カラハナレタ事ガナイデアロウ、印度ノ平和ヲ維持センガタメニハ是非共東洋ニ於テ日本ノ地位勢力ヲ認メ之レト同盟ノ必要ヲ感ジ腹ノ中デハ馬鹿ニシテヰル新興國ヲ相手ニシ日英同盟ヲ締結シタノデアル、表面上ハ東洋ノ平和ヲ維持センガタメト云フモノノ實ハ印度ノ平和維持ガ出來レバ充分デアルト云フ個人主義ノ手先ニナツタト思ヘバ日本ノ外交ノ無能ナル事驚ク外ナイノデアル、現ニ目下大ナル時間ト莫大ナル費用ヲ投ジ我ガ忠勇ナル海軍ガ風雨ト極暑トニ戰ヒ「スマトラ」海峽ニ晝夜ノ別ナク警戒ヲサヲサ怠ナキガ如キハ英國ニ代リテ印度ヲ保護スルニ外ナラナイノデアル、斯ノ如ク日、英、印三國ノ關係ハ密接微妙ノモノデ日本ハ英國ニ並デ否英國ニ倍シテ印度ノ謎ヲ解キ經濟上大イニ寶庫ヲ開拓シ國家ノタメ盡ナケレバナラヌト思フ。

印度ノ地理及氣候概畧。

印度ハ其ノ本土、緬甸及ビ錫蘭島ヲ併セテ面積百八十二萬方哩、我ガ國面積ノ約九倍、人口約三億二千萬人、我ガ國人口ノ約五倍デアル、北部ハ「ヒマラヤ」山脈綿々トシテ聳ヘ南部ニハ「デカン」高原ガアル、ソノ間ニ「ガンジス」及「インダス」河ガ流レテ居ル、印度本土ニ入ルニハ三ツノ門戸ノ内イヅレカヲ通ラナケレバナラヌ、即チ東ニカルカッタ、西ニ孟買、中央ニマドラスノ門戸ガアル、首府ハ先年孟買カラカルカッタニ移サレタ、外國貿易殊ニ日本トノ貿易ノ盛ンナ港ハ孟買、カルカッタ、チウチコリン等

デ我ガ國瀛船會社ノ寄港地デアル、印度總面積人口中土王州ハソノ三割即チ六十八萬方哩ヲ占メ人口七千萬ヲ有シ尙更ニ小別シテ六百七十五國トナシハイデラバットノ如キ八萬二千方哩、人口千三百萬ノ大國モアレバ又我國ノ一郡ニスギヌ小國モアルノデアル、普通印度ト云ヘバ誰シモ熱帶地ヲ聯想スル、如何ニモ印度ニハ熱イ所ガ多イ殊ニ「ガンヂス」河域ノ夏季ノ如キ室ノ内デ百二十度ニモ達シ日本人ナドニハ到底堪ヘラレヌ所ガアル、然シ北部「ヒマラヤ」山脈地方ニ行クト年中「ストーブ」ヲ焚カナケレバ寒サヲ凌ガレヌ所モアル北部及ビ中央高原地方ハ十一月ヨリ三月迄寒冷デ降霜ヲ見ル四月ヨリ十月迄ハ暑氣及ビ雨期デ溫度ガ百三十度ニモノボル、南部及西部地方ハ低地デ氣候ノ差少ク溫度ハ七十度ヨリ九十五六度ヲ上下シテヲル、コノ地方ハ四時米及甘庶ノ耕作ガ出來ルノデアル、世界中デ印度ホド雨期ヲ氣間フ國ハナイ、雨期ハ季節風（モンスーン）時期デアル、西南「モンスーン」ノ遲速强弱ハ印度大半ノ豐凶ヲ決スルモノデ六月中、下旬ヨリ初マリ九月ノ下旬ニ終ルヲ常トスル、コノ間ハ一日ニ幾回トナク驟雨及「スコール」ガ來テ不愉快デアル、昨年モ「モンスーン」ガ一ケ月許ヲクレタタメ農作コトニ綿ノ產出ヲ減シ結果印度ノ經濟上ニ大影響ヲキタシタトノコトデアル、東北「モンスーン」ハ十月ヨリ十二月迄半島ノ東南部ニ降ルノデ中央「ベラール」州ニ及ブコトガアル、北部印度ニハ西南「モンスーン」後ハ多ク乾燥シ日々晴天打チツヾキ十一月ヨリ翌年三月マデ五六回ノ驟雨ガアルノミデ作物ナドハ每朝降ル露ノタメ生命ヲツナイデヲルノデアル、要スルニ印度ニ於ケル氣候ハ所謂大陸的氣候デアル、日本ト直接ノ關係アル孟買地方ノ氣候ニ付キノベンニ孟買ハ西海岸ニアルガ故ニ氣候甚ダシキ變化ナク七十五度ヨリ百度位ヲ上下シ四季ノ別ナクウルワシキ花ガ咲キ亂レテヲル、西南「モンスーン」ノ支配ヲウケ六月ノ三週目頃カラ九月ノ末日迄雨期デ此ノ地方デハ非常ニ溫度ヲ減ゼシムルノデアル、最モ暑イノハ季節風時期ニ入ル前後即チ五月ト十月デ百二十度ニモナルコトガアルガ要スルニ日本人トシテハソレホド生活シニクイ土地デナイト思フノデアル。

印度ニ於ケル住民及ビ言語。

印度ト云ヘバ誰シモ赤銅色ノ皮膚ヲ聯想スルガ中ニハソレ以上亞弗利加ノ黑人ト見マガフ程黑色光澤ヲ有シ漆ノ如キモノガアルカト思ヘバ又中ニハ歐洲ノ最モ白ヒ人種モ劣ラヌ程ノモノガアル「パーシー」種屬ノ如キ一見西洋人ト異ルコトナク殊ニ婦人ノゴトキ「フランス」美人モ後ニ憧着スルホドノモノガアル然シ一般ニ營養甚ダシク不良、足ノ長イ、淺黑イ皮膚ヲ有シ、齒ノイヤニ白ヒ土人ガ多イ、外國人ハサスガニ英國人ガ多クスベテノ中樞ヲナシテ居ルガ戰爭ノタメ其ノ數甚ダ少イ其ノ他各國ノ人ガ少數ハ居ル日本人ハ馬來半島及スマトラヨリハ遙ニ少ク、多クハ都會ニ集合シテヲル、目下孟買ニ男約二百名、女約百六十名カルカッタニ男約三百人、女約三百五十名其ノ他內地ニ少シハ散在シテ居ル多クハ會社員デアルガ女ハ殆ンド全部春賣婦デアル。言語ニ至ツテハ之レヲ大別シテ九種ト云フガ猶細別スレバ二百二十種アルト云フ甚ダシキハ五百種モアルト云フ現ニ印度ノ郵便局デ區分シテヲル文字ノ種ダケガ七十餘ヲ算シテヲル、印度ノ全部ニ涉ツテ一般ニ通用サレルモノハ「ヒンドスタニー」語デ日本語ニ似タ点ガアル、英語ハ印度ノ全部ニ通用スルモノノ如ク考ヘラレテ居ルガ實ハ全人口ノ二十分ノ一位シカ解セヌ、土人デ之レヲ解スルモノハ「パーシー」人、外國貿易ヲナス人及ビ外國人ヲアテニスル商人位ノモノデ軍人、巡査ナドガ英語ヲハナスコトガ出來ヌノデ甚ダ不便ヲ感ズルコトガ多イノデアル。

印度ニ於ケル宗教。

印度ハ文化夙ニ開ケ佛教ノ開祖釋迦ノ出生地デ昔ヨリ宗教ガ盛ンデアル然シ佛教ノ如キハ却ツテ印度ヨリ東部日本及支那ノ方ガ盛ンデアルノハ甚ダ

不思議ナコトデアル宗教ノ種類ハ甚ダ多ク、印度教徒ガ最モ多クテ二億二千萬次ガ回教徒デ六千七百萬次ガ佛教徒デ一千萬、基督教三百九十萬、「シーク」教徒三百萬、「ジャイナ」教徒百二十萬、「パーシー」教徒十万、猶太教徒三萬、無神教徒三十萬、不明百六十萬人ト云フ統計ガアル、同ジ宗教ヲ奉ズル屬ハ協力結合シ一ツノ社會ヲ作リ異教徒ニ對スルノデアル、而シテ異教徒トノ交渉ヲコノマヌ樣デアル即チ異教徒トノ結婚ノ如キ絶体ニ許サナイ如キハ其ノ一例デアル、同シ宗教ノモトニチル人々ガ美シキ一ツノ團体ヲ作リ一家モ及バヌコトハカノ「パーシー」教徒ノ社會ヲ見テモ明デアル次ノ樣ナ事實ヲ聞イタコトガアル、アル「パーシー」教徒ノ一婦人ノ家庭ガ非常ナ不幸ノ境遇ニ陷イツタ、ソノ婦人ハ健氣ニモ父母ノタメ凡テノ犧牲ヲハラツテ賤シキ家業ヲナスベク故郷ヲ去ツタノデアル、コレヲキキツタヘタル同族ノモノハ同シ教徒ヨリカカル不潔ノ人ヲダシテハ祥罰大ナルヤ必セリトナシ莫大ナル財ト時間ヲ投ジソノ婦人ヲ探シダシ家族ヲ救ヒ幸福ニ導キ、ウルワシキ團体ニ加ヘタト云フコトデアル。

印度ニ於ケル奇習。

印度ハ古イ國デアル、而シテ色々ノ内地ノ人ノ豫想モツカナイホドノ風俗習慣ヲモツテヲル、コヽニ其ノ一二ヲ述ベヨウト思フ。

沈默ノ塔（Tower of silence）「パーシー」教徒ニハ一ツノ秘密ガアル、舊習ガアル、翠シタタルバカリノ熱帶樹ノ間ニ幾年ヲ經タ古イ丁度「アラビアンナイト」ノ中ニ出テクル樣ナ塔ガ旅人ヲシテアル一ツノ疑念ト好奇心トヲ起サシムルノデアル、即チコヽニヲイテコノ一大秘密ガ行ハレル、世人ハ之ノ塔ヲ沈默ノ塔ト稱シ甚ダ神秘的ニ解シテヲル「パーシー」教徒ノ中ニ死人ガ出來レバソノ死体ハ直チニコノ塔ノアル森ノ寺ヘト運バレル而シテ家族ノモノハ壯嚴ナル式ノ後ニ死体ト別レナケレバナラヌ、死体ハ直チニ二人ノ人ニカツガレテ塔ノ中ニ入レルノデアル、塔ノ周圍ニハ常ニ一種ノ人食鳥、七面鳥ノ位ノ大サデ鷲族ノ嘴ヲ有シ、首ガ長クテ烏ノ樣ニ眞黑、イカニモ貪相デ地獄カラデモキタ樣ナ氣味ノ惡イ鳥ガヲル、コノ鳥ガ死体ヲ處置スル役目ヲ有シテヲルノデアル即チ入レラレタ死体ハ一時間ナラズシテ鳥ノタメ液体ト骨トニサレテシマウトノコトデアル、シカモソコニ一ツノ秘密ガアル、コノ塔ノ内ヘハ「パーシー」教徒ノモノト雖ヘドモ入ルコトガ出來ヌ、唯入ルコトノ出來ルノハ死体ヲ運ブ二人アルノミデアル、コノ死体運搬人ハ終生コノ職ニアリテ森ヨリ一歩ナリトモ出ルコトガ出來ヌ、死ス迄死体ヲ運搬シ自分モ死体トナリ塔ノ内ニ運バレ鳥ノタメニ喰ハレルノデ塔内ノ秘密ハ永久ニ秘密トナリ世界ニ發表サレナイノデアル、「パーシー」教徒ハ之レヲ以テ死後ノ處置ノ甚ダ衛生的ナルモノト自覺シテ居ルラシイ、孟買ノ博物館ニ之ノ秘密ノ種アカシガアル、ソレニヨレバ塔ノ底ハ漏斗狀ヲナシソノ中央部ニ圓形ノ穴ガアル、ソコニハ「コークス」ノ樣ナモノガアツテ死体カラ出ル液ヲ濾過スル樣ニナツテヲル、斜面ニナツテヲル底ヲ三ツニ區別シ其ノ最内部ハ子供ノ死体ノヲクトコロ中央部ガ女子最外部ハ男子ノ死体ノ置クトコロデ死体ヲヲク所ハ舟形ニツクラレソノ周圍ニ少イ溝ガアル、ソノ溝ガ集ツテ中央ノ穴ニ入ルノデアル、死体ガ舟形ノ「ボツクス」ニ置カル、ヤ、ウエタ人喰鳥ガキテ直チニ液ト骨トニ喰ヒツクス液ハ少イ溝ヲ流レ集ツテ中央ノ穴ニ入リ濾過サレソノ液ハ再ビ塔ノ出口デ濾過ノ上美シキ透明ノ水トナツテ海ニ入ルソウデアル、骨ハ中央ノ穴ニテ風雨ノタメ遂ニハ粉トナルソウデアル、人間ガ水ト粉トニナルトハ御伽話ニデモアル樣ダガ然シ事實ダカラ面白ノデアル。

結婚。　印度ノ同姓ハ更ニ數百ノ小種族ニ分レテヲル、其ノ小種族ハタガイニ結婚スルヲ許サヌ、モシ結婚スレバ放逐サレル故ニ血族結婚ガ盛ンニ行ハル即チ印度デハ從兄ガ從妹ヲ娶ル位ハ平氣デ甚ダシキハ叔父ト姪ト夫婦ニナルモノガアル姪ヲ娶ルノガ叔父ノ正當ノ權利ノゴトク考ヘテヲル然

シココニ除外例ガアル兄弟ノ子ハ姉妹ノ子ト結婚ノ權利ハアルガ兄弟ノ子同士モシクハ姉妹ノ子同士ハ相娶メルコトハデキヌ又是レト同時ニ母方ノ子孫ト父方ノ子孫トハ相互ニ結婚シテモ差閊ハナイガ母方ノ子孫同士モシクハ父方ノ子孫同士ハ絶体ニ夫婦ニナレヌトノコトデアル、家庭ハ夫婦主義デ父子、兄弟ノ愛情少ク之レガタメニ父子相殺スガ如キ悲慘ヲキタスコトシバシバアル、夫ガ不幸ニシテ死スレバ妻ハ最早人間ノ交際ガ出來ヌ況ンヤ再婚ニヲイテヤデアル、否デモ應デモ髮ヲ剃リ一切ノ粧飾ヲ斥ケ謹愼ノ態ヲ保タナケレバナラヌ又一切ノ儀式ニ出席スルコトガ出來ヌモシ何等ノ事情ニヨリ出席スルコトガアルト非常ニ不吉ノ兆トシ人々ノ恐怖スルトコロトナル。

波羅門教徒ノ潔癖。印度人ノ内デ最モ上位ニヲルノガ波羅門教徒デアル、コノ波羅門教徒ノ傑癖ハ宗教上最モ重大ナル事柄デアル例ヘハ同族ノモノガ葬式ニ列スルゴトキコトアル時ハ其ノ人ハ必ズ水浴シテ其ノ身体ヲ清メナケレバ決シテ家ノ内ニ入ルコトガ出來ヌ又婦人ガ出産スレバ先ツ一ケ月ハ別居シナケレバナラヌ其ノ間ハ決シテ家財ナドニ觸レテハナラヌ別居一ケ月ガ經過スルト沐浴シ始メテ家ニ入ルコトヲ許可サレル故ニ月經時ナドハ尚更ノコトデアル別居沐浴ハ勿論ノコト其ノ間ニ身ニ纏ツテヲル一切ノモノヲ洗濯シナケレバヤマヌ、波羅門教徒ハ宗教的義務トシテ一日一回ハドンナコトガアツテモ水浴シナケレバナラヌ身体ノケガレタ時ハ一日中ニ幾回トナク水浴スル不淨ヲ受クルト必ズ沐浴シテ其ノ手足ヲ濯フガカレ等ハ之レノミテ滿足セズ屹度其ノ口ヲ嗽ガナケレバ止マヌ毎朝起床後洗面時ニ口ヲ嗽クコト甚ダシク小用後ガ四回、大用後八回、食後ガ十二回含嗽スルコトニ定マツテヲル殊ニ醫者ニ至ツテハ甚ダ振ツタ診察ヲスル、波羅門教徒ノ醫者ガ他ノ異教徒ノ患者ヲ診斷スル時又ハ異教徒ノ醫者ガ波羅門教徒ノ患者ヲ見ル時ハ必ズ絹布ヲ脈上ニ掩ツテ診斷スル直接異教徒ノ肉体ニフレ或ハ異教徒カラ直接肉体ニフレラレルノヲ甚ダ不淨ト感ヘテヲルノデアル。（未完）

雜報

天然痘豫防訓示　本年は早くも天然痘流行の兆あるを以て内務省にては中川衛生局長の名を以て依令通牒により左の訓示を各府縣知事に發したり。

客年兵庫縣並に大坂府に痘瘡發生以來本年に入りて更に富山、香川、愛媛、高知、宮崎の各縣に新患者を見るに至り漸次各地に蔓延せんとする傾向あり又香港地方及關東州殊に大連民政署管内に於ける痘瘡は益猖獗を極めんとするの狀況に在りて何時病毒の侵入を蒙るやも計られず注意せられたしと。

本年痘病患者數　去三月五日正午までに達したる各地方長官の報告に依れば去る一月以降發生せる痘病患者は累計一千名に達し十年振りの大流行にて種痘法實施以來未曾有の多數なりと。

△高知三十△宮崎百七十七△香川六△熊本十△東京一△德島二十一△鹿兒島十三△大阪五百六十六△愛媛十八△佐賀十△三重一△廣島四△兵庫九十四△和歌山七△石川一△京都三△海港檢疫發見十三

英本國及其領土に於ける本邦醫師開業資格　英本國に於ける本邦醫師開業資格は從來醫學博士及帝國大學卒業醫學士に限られ只英領海峽殖民地、馬來聯邦及ジョホール州に於ては昨年六月以來右範圍を擴張し我官公立醫學專門學校及文部大臣指定の私立醫學專門學校卒業醫學士に對し

ても開業資格を認めらるに至りしが今回英國外務省より我在英大使館への通牒に依れば英國中央醫事委員會にては昨年十一月二十七日の會議に於て前記各醫學專門學校卒業の醫學士は英國本國に於ける外國醫師名簿に登錄するを得而して右登錄濟本邦醫師は英本國并に其他の英領土（in any other Parts of his Majesty's dominions）に於て內科、外科及產科醫を開業することを得尤も英領地に於ては各其地方の法令に從ふことを要する旨議決したりと。

●露國と本邦醫開業問題　露國領圖、殊に日本の出稼人多數なる地域內に日本醫師の開業を公認されたしとの意味を以て曩さに我外務省より露國政府に向つて交涉中なりしが其後露國官憲と我駐露大使との間に數次の交涉を重ねたる結果、露國政府は、日本人五百名以上居留し居れる地域に限り日本人に對する治療行爲を認容すべしとの意見を漏したる由なるが日本人五百名以上の地域は極めて少なく沿海州の中にても三四ケ所あるに過ぎず而も無制限に開業を認むるにあらずして一定員數を限りて開業を許可するの方針なるやにて斯くては折角此の交涉を成立せしむるも却りて日本醫師將來の發展上餘り有利ならず夫れよりも現に其の洲知事限りにて開業を默許されつゝある地方多きを以て寧ろ有利なりとし若し國交的交涉にて纏り得べきことならむには本邦人五六十名以上居留し居れる地域內に限り二名以上の開業醫を公認せしむることを在浦鹽斯德の日本醫師團は希望し居りて曩て外部省に向つて在浦醫師團より建議すべしと聞く。

●文部海外留學生　去三月上旬の調査によれば文部省が昨大正五年度に於て海外留學を命じたる者官費二十三名、私費四名にして尙三月中に一二名の任命ありて其全部を終る筈なるが其內譯左の如しと。

▲官費留學　△醫學七（米五、英瑞二）△工學八（米六、英瑞二）△文學四（米三、露一）△理學一（米）△農學三（米）

▲私費留學　△商業二（米）△文學二（米）

●學校衛生官制改正　文部省にては學校衛生の振興を圖り且つ從來不統一なりし學校衛生の事務を統一する爲め曩に官制に改正を加へ新に學校衛生課を設け衛生官一名、屬二名、囑託數名を置き、專ら學校衛生事務を統轄せしめ既に北衛生官の任命ありて着々其實行に當りつゝありしが緊要なる學校衛生を刷新するには機關尙ほ不充分なるを以て、更に近く官制に小改正を加へて定員の增加を計る筈にて大體現在の學校衛生官の下に更に學校衛生事務官（奏任）を置き又現在の屬二名以下更に二人を增加し囑託も更に數名の增員を行ふに至るべく右は極めて緊急を要するものとして之が經費は來る臨時議會に提出せらるべき追加豫算中に計上さるる豫定なりと。

●牛乳の脂肪率統一　牛乳脂肪率は省命により之を百分の三以上の範圍內に於て地方長官之れを定むべしと規定せられ居るに地方長官により其含有量率に高低あり衛生上好ましからざるものありとし內務省は保健調査會の建議に基き之を統一すべく各地方長官の意見を徵したる結果愈々百分の三均一とするを以て適當と決し近く中央衛生會の諮問を經て同省命を改正實施するに決定せりと。

●金澤市醫師會定期總會　去月廿五日午後六時より大手町醫師會堂に於て大正六年度定期總會を開きしに出席者は委任狀を加へて百〇一名を算し尙ほ山上衛生課長列席せり先づ

一、昨年流行の「コレラ」に就て　衛生技師　吉見通義氏

一、予の診斷書一件　山田孝太郎氏

一、大日本醫師會理事會の報告及希望　飯森益太郎氏

等の演說あり次に前年度會務（理事三木三郎）及會計（理事高口保太郎）の

報告終りて後正副會長、議員及び石川縣醫師會議員の改選を行ひ午後十一時散會せり。

校內消息

●前學年試驗　去月一日ヨリ醫學科及藥學科ノ學年試驗ヲ施行シ仝月十日終了セリ。

●大正六年三月入學選拔試驗　本年度入學志願者醫學科四百四十五名、藥學科九十三名(合計五百三十八名)ニ對シ左ノ日割ヲ以テ選拔試驗ヲ施行シタリ。

數學(代數、幾何)	三月十八日(日)	自午前八時至仝十時廿分
物理學	三月十九日(月)	自午前八時至仝九時
動物學	仝　日	自午前十時至仝十一時
國語及漢文	三月二十日(火)	自午前八時至仝十時
化學	仝　日	自午前十一時至仝十二時
外國語	三月廿一日(水)	自午前八時至仝十時
身体檢査	三月廿二日(木) 三月廿三日(金)	自午前八時

因ニ本年度ノ募集人員約左ノ如シ。

醫學科第一學年	百　名
藥學科第一學年	三十五名

●大正六年三月入學試驗委員　左ノ諸氏ハ本年度入學選拔試驗ニ於ケル夫々頭書ノ科目ニ對シ審査委員ヲ任命セラレタリ。

國語及漢文科	教授醫學博士　下平用彩
數學科	仝　石坂伸吉
化學科	教授　加藤直三郎
物理學科	仝　加藤靜雄
外國語學科	教授醫學博士　松原三郎
動物學科	仝　中村八太郎
身体檢査	
醫員長	教授醫學博士　松原三郎
醫員	授業補助囑託　松田茂
仝	副手囑託　那谷與一
仝	仝　近藤時男
仝	仝　森田隼三
仝	仝　石川寛二
仝	仝　佐伯義久
仝	仝　塩村和喜男
仝	仝　淺井貞準
仝	仝　織田他家男
仝	仝　大城喜太郎
仝	仝　內海元一郎
仝	仝　橋本學
仝	副手　柴野順吾
仝	仝　石黑四郎
仝	仝　清水亮
書記	委員　川島俊
仝	仝　吉野巖
教務囑託	仝　若林定次郎

委員　教務囑託　加藤信智

●陸海軍衛生部依託生　本年度ニ於テ本校生ニシテ陸軍衛生部依託生トシテ採用セラレシ者左ノ如シ。

醫學科第四學年　青木兵三　仝　鷲塚政光
仝　第三學年　前田信吉　仝　清水友次郎
仝　第二學年　武部伴吉　仝　大野計信
仝　小野木豐俊
藥學科第二學年　中保恭一

仝上海軍々醫學生トシテ採用セラレシ者左ノ如シ。

醫學科第二學年　近藤政義

●金澤醫學專門學校危險藥品取扱規程　今回左ノ如ク規定セラレタリ。

左記藥品ハ概ネ次ノ注意ヲ以テ取扱フベキモノトス

酒精、木精、エーテル、輕油、ベンツオール、キシロール、トルオール、アツエトン、二硫化炭素、黃燐、カーリウム、ナトリウム、鹽素酸加里、ヂアツオ化合体或「ニトロ化合体」等

第一　点火性藥品ハ總テ堅牢ナル鐵葉鑵又ハ厚壁硝子壜ニ容ルルコトヲ要ス

第二　一「リーテル」以上ノ前記藥品ヲ實驗机上ニ置カザル樣注意スルヿ

第三　一「リーテル」以上五「リーテル」以下ノ点火性藥品ヲ容レタル器幷ニ同藥品ヲ以テ貯藏セル標本類ハ直射日光ノ入ラザル且ツ火氣ニ遠ザカレル低溫ノ場所ニ置クヿ

第四　大量ノ点火藥品ハ火氣ヲ用キザル倉庫又ハ土間ニ貯藏スベシ容器ノ腐蝕ヲ豫防スルヲ要スルヤ勿論ナリ

第五　黃燐ハ水ヲ充タセル廣口壜ニ容レ更ニ水ヲ充タセル桶ニ納ムベシ

第六　カーリウム、ナトリウム等ハ石油ヲ滿タセル堅牢ナル廣口壜ニ貯藏シ鐵葉鑵ニ納ムヘシ

第七　鹽素酸加里、ヂアツオ化合体或「ニトロ化合体」等ノ爆發性藥品貯藏ニ對シテハ特ニ注意スルヲ要ス、例ヘバ磨擦壓迫等ヲ避クルタメ厚紙筒ニ納ムルガ如シ

●金澤醫學專門學校非常心得　左ノ如シ。

第一條　本校及分教場並ニ金澤病院失火又ハ近火等非常ノ節ハ職員及生徒ハ授業時間中ニアリテハ校長ノ指揮ニ依リ授業時間外ニアリテハ速ニ駈付ケ校門内ニ集合シ先着職員ノ指圖ニ依リ消防又ハ運搬ニ從事スヘシ

第二條　前條非常ノ節ハ警鐘ヲ以テ左ノ如ク非常ヲ報セシム
但金澤病院ハ本校ト同視ス

一　本校内失火　亂打　○-○-○-○-○-○-○-○-○
二　避難ヲ要スルトキ　五點　○-○-○-○-○　○-○-○-○-○
三　近火（凡ソ二丁以内）三點　○-○-○　○-○-○

第三條　前條非常ニ際シ常設喞筒掛員ノ外他ノ職員及生徒ヲシテ左ノ手配ヲナサシム

一　取締手配
二　運搬手配

第四條　取締手配ノ大要ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一項　事務員ハ巡視及小使ヲシテ直ニ校門ヲ閉鎖セシメ出入ノ者ハ小脇門ヨリ通行セシムヘシ

第二項　校門ヲ閉鎖シタルトキハ巡視ハ小脇門ノ側ニ立チ嚴重ニ出入ヲ監視シ本校職員生徒警察官消防手等ノ外ハ門内ニ入ルヲ禁スヘシ

第三項　巡視一名ハ始終校内ヲ巡邏シ火ノ元盜賊等ヲ戒シムヘシ

第四項　事務員一名ハ玄關ニ見張シテ出入ヲ監視シ駈付人姓名等ヲ書

留ムヘシ

第五項　小使ハ各室ヲ見廻リ夜中ニ於テハ高張提灯ヲ照シ其他諸所ニ點燈シテ出入便宜ノ用意ヲナスヘシ

第六項　先着職員中一名ハ駈付ケタル生徒ヲ二列又ハ四列ニ整列セシメ混雜ナラサル樣注意ヲナスヘシ

第五條　運搬手配ノ大要ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一項　入院患者避難ヲ要スルトキハ臨床講義擔當ノ教官ハ生徒ヲ使用シ運搬セシムヘシ

但避難地ハ便宜定ムルモノトス

第二項　職員ハ生徒ヲ指揮シ各室非常持出ト貼付シアル重要ナル物品ヨリ漸次運搬セシムヘシ運搬シタル以上ハ責任者ヲ定メ監守セシムヘシ

第六條　生徒ハ非常ノ節必ス制帽制服ヲ著用スヘシ

附　則

第一條　校内ニ常設喞筒使用掛ヲ置ク左ノ如シ

掛　長　一　人

副掛長　一　人

掛　員　若　干

第二條　掛長及副掛長ハ職員中ヨリ校長之ヲ命ス

第三條　掛員ハ醫學科及藥學科各第一學年生徒トス

第四條　掛員ハ毎年五月交代スルモノトス

第五條　喞筒練習ハ少ナクモ一學年數回之ヲ行フモノトス

以　上

通　信

●八川修一郎氏（大正五年卒業、横濱市開業）

（前畧）小生當横濱に歸省致してより別に大したる變りもなく無事消光致し居り候間御安心被下候、小生が父は當横濱に二十年來開業致し居り目下も相變らず日ノ出町に開業致し居り、小生も手助けに勤務致し居り候、何れ期を撰んで上京又は東京通ひにて（横濱東京間は電車にて約四十分間位）勉強致し度くと存じ候當横濱には博士としては外科の難波要氏一人にして可なりの大病院に候其他は混合にして、諸要の場所は專門學校出身者に有之候、從つて專門學校出身者は可なり好遇を受け居り候、又金澤出身者も可なり勢力を有し、人數に於ては近いだけあつて千葉出身者第一を占むれど近頃は金澤出身者が次第に增加する傾向を有し何となく悅ばしき感じが致し候、今に始まらぬ事ながら頃日餘計に必要を感じたるは外國語に候、殊に當地は日本中最も外人の多き所、而して外人（來國人）の醫師あれども反つて日本の醫師の方が評判宜しく、爲めに英米及び近頃は露國人が增加したる故英語の必要益〻感ずるに到り申し候、小生は幸ひ在學中も時に英語を勉強致し居り候ひしが愈々外人の患者を取扱ふに迨んで大に困難を感じ殊に過日は獨乙人も少〻來り候、獨乙人も横濱に可なり居る樣になれど、彼等は哀れにも何處の會社、學校より放逐され、以前は可なりの好位置を占め居たりしが目下は生活すら不充分なりとてこぼし居り候、其の中一人の患者は出血性網膜炎を起し豫後不良を宜することも出來ず治癒もせず誠に同情の到りに御座候、之れ等の患者に對しては治療と獨乙語とを交換致

し居り候、何れにしても外國語は實地開業するに必要なること云ふまでもなく、同業者間にも便利がられて好都合に御座候。頃日多忙なる爲め東京の情況も知らず何れ其の中に詳報申述ぶべくと存じ候。（後略）

横濱市日ノ出町一丁目　日ノ出眼科醫院　修一郎

一月八日

●關　嘉一氏　（大正五年卒業、京大研究）

（前略）小生事去る十八日付を以て京都帝國大學醫科大學微生物學教室無給雇拜命松下禎二博士の許に師事仕居候小生も今回の入學も選科生として入學せしより無給雇の事は至極研究に便利にて喜び居候然し研究料は全部自費に有之動物實費と計算致せば月拾五圓位要用に御座候

當教室は來る四月よりは二部に分離せられ衛生教室と微生物學教室と相成申候前者の主任は戸田教授後者の主任は松下教授に御座候

當微生物學教室は松下教授を始め職員十名大學院學生二名、研究科學生四名、選科四名、外に講師二名合計二十二名の大勢に有之候松下博士は精力絶倫に有之朝は八時より晩は十二時頃まで御勉強なし居られ候小生の如き怠惰者は赤面勝に御座候當教室には月一回雜誌抄讀會を開催致し居候本月は本日午後七時より教室にて開催の豫定に候

毎日中食は松下博士を始め二十二名の家内が一堂に食し致し居候至極平民的にて心地良しく感ぜられ候

京都醫科大學微生物教室　（舊姓矢野）　關　嘉一

一月二十七日

●鈴木外男氏　（大正四年卒業、臺灣奉職）

小生昨年四月時恰も臺北に於て本島領臺二十年紀念共進會開催當時新竹醫院々長中川幸庵氏の御招きを受けかれて志望の亞熱帶醫學の研究にもかなと存じ越後葛塚渡邊醫院を辭し南國の人となりたる次第に御座候其後八月迄中川先生の下にて内科醫員として勤務罷在り候が當作業所囑託醫が錫口養生院々長に榮轉せられし爲め突然總督府の命により其の後任として當所に轉任致し爾來今日に及びたる次第に御座候當醫務所は總督府土木局、工事部、作業所の三役所の役員、工夫及び其等の家族の人々の疾病を處置し又新に入所せんとする人々の体格檢査などなすべき所にして家族等全部を含すれば優に千數百人に上り申候故に日々の患者も數十名多き日は六七十名に上る事も有之候て醫者と申すは小生一人のみ他に藥劑師及小使等を使用致し居り開業屆も出し居り候間恰も半官半民的に御座候已に渡邊兄の通信によりて御承知の御事と存じ候が醫藥両科と合し本島に在住する母校出身者は四十餘名に上る由にて其内當臺北に十七名在住致し居り皆それ〴〵活動し母校の名を辱かしめざるは大に吾人の意を強ふせしむるに足る事と存じ候昨年末も同窓生相集り親睦の宴を開き近頃になき愉快にて遠く千里を距つる南海の孤島に母校出身者打集ひ金澤辯丸出しにて舊を語り新を談じ會心の一日を送り申候新竹中川院長も肺ヂストマの御研究御苦心の効空しからず已に論文通過し近く桂冠ある由にて我々末輩は一日も早く其の日の來る事を待ち居り申候

本月御送付下されし十全會誌を拜見し金子先生三十年紀念會當日の記事を拜讀し先生の御温顔目前に彷彿として浮び今更に先生の御高恩を思ひ遙に先生の万歳を祈り居り申候

新聞紙上によれば内地本年は非常に寒氣も嚴しき由殊に御地は積雪二尺五六寸とか承り嘸かし小立野の風や一入ならんと存じ居候當地も本年に入りて俄然氣温下降し昨今五六十度を往來致し居り四五里の近山に雪を載き居候永き在住者はわざ〴〵登山して雪の土産を持歸る事流行致し居り候

臺灣臺北石坊街一丁目
總督府土木局醫務所
鈴木外男

◉大西清治氏（大正五年卒業。大阪鑛務署醫）

鑛務署の内容にても少々御話し申可く候御承知の通り鑛務署は全國に五ヶ所（東京、大阪、福岡、仙臺及北海道）に有之小生等の如き衛生技術家は各〻一名宛勤務致し居り候、當署は鑛政課、鑛業課及分析課に分れ更に各數種の係有之候小生等は其内の監督係に席かあるものにて同係には、法學士一名、早稲田法學士一名、普通事務家一名、雇一名及小生の五名が監督係の事務の事に從事致し居るものに候尚技術の方面に於ては、工學士一名、高工機械科出一名（既に高等官に候）（以上技師兼監督官）技手のものは高工採鑛冶金科出三名及大學出一名以上の十一名にて監督に從事致居り候（各鑛務署も同樣）御承知の通り昨年九月法律の改正と共に事務極めて多忙となり爲に小生等も未だ豫定の行動を取る事が出來ざる樣子に候小生は昨夏以來漸く三度出張せしのみ未だ實地の智識は極めて少なき事に候今春よりは大いに活動致す豫定に御座候、我が國に於ける工業衛生殊に鑛山衛生學は極めて幼稚なるものにて成書としては漸く昨年工業衛生學なる書出來致し候へ共未だ鑛山方面は少しも研究無之候外國に於ても專門の成書は一册も無之有樣に候勿論工業衛生に關しては數多有も戰爭の結果未だ手に入らす大いに遺憾に思ひ居り候、昨夏以來餘暇には讀書に耽り居り當署には左の書物買求め候

横手博士　衛生學
宮入博士　仝
福原博士　社會衛生學
工業病論
工業衛生學
Modern Factory.
Air. Wattar & Ford.
Luftunreinigung dmch d. Rauch d Gewerbenbetriebe.

以上の外、コンラードの國民經濟學等も讀み居り候、專門の雜誌も取り度きも獨乙ものは來らず、英の Journ. of Hygiene を取る事に致し候未だ研究と申可き程の事は致さず候へ共目下少々考へ居る事も有之微才ながら近々御笑覽に供したき考に候一生社會衛生の爲め身を盡したき決心に候（後畧）

大阪鑛務署内
大西清治

二月二十四日

◉八島修氏（大正三年卒業。一年志願勤務）

（前畧）目今の第二次勤務演習は見習醫官として服務致居候一年地方に有之候事として未だ慣れ不申軍人氣風の回復に苦心致居候母校出身も殆んと無之き事と存居候處三等軍醫に眞野君（昨年出身）あり引續き勤務演習者に田中君（清次）あり同僚に西本君あり大に意を強く致候盛に發展し氣焔を吐かんと結托致し樂しく起居罷在九十日間の事に候へば何事をか求め得度と思考致し居り候

當今の階級は一年志願兵として最も得意に最も愉快なる期に候由なるも一年間の病院生活に總ての已往を忘れ些〻面目を添ふる事も御座なく候

當地は朝夕は有名なる愛宕嵐に苦しめられ申候へども日毎の快晴日照には實に心地よく御座候

京都府下伏見歩兵第三十八聯隊
第三中隊豫備見習醫官
八島修

大正六年三月三日

叙任及辭令

●内　閣

（二月廿六日）

陞叙高等官五等　防疫官正七位勳六等　松　王　數　男（明治廿三）

●文部省

（二月廿八日）

兵庫縣ヘ出張ヲ命ス　文部省學校衛生官　北　豐　吉

●石川縣

（二月十七日）

依願職務ヲ免ス　金澤病院醫員　八　島　脩（大正三）

（二月廿八日）

金澤病院婦人科兼産科部長囑託　藏　光　長　次　郎

年手當金四百圓給與

金澤病院醫員　内　田　豐　咲（大正元）

九級俸給與　仝　人

金澤病院婦人科兼産科部長囑託藏光長次郎不在中代理ヲ命ズ

高　桑　勇　次　郎（明治卅九）

金澤病院醫員ヲ命ス、十二級俸給與

人　事

●石坂博士　本校生理學教授石坂伸吉氏は明治四十一年東京醫科大學を卒業し後大澤博士の助手となり次で本校講師より教授となり大正三年歐洲より歸朝せられしが今回東京醫科大學教授會の推薦により醫學博士の學位を受領せられたり、仝氏は沈思默考の篤學者にして此名譽は當然なりと雖も亦吾校の名譽甚だ大なり。

●矢吹　清氏（明治四三）　卒業後金澤病院に研究し後滿鐵奉天病院外科部奉職中の處今回仝院より拔擢せられ外科的病理學研究のため瑞西國へ留學を命ぜられ去月既に露國經由出發せられたり此れ獨り仝君の榮譽のみならず延て我母校の名譽たり吾人は切に仝君の健康と成効を祈り益々斯界のため貢献せられんことを望む。

●林戸正之助氏（大正三）　金澤市私立金城病院に奉職の處京都醫科大學耳鼻咽喉科教室（和辻博士）へ研究のため入學せらる。

●川久保俊一氏（大正四）　前項漫錄欄にあり。

●八島　脩氏（大正三）　金澤病院外科部奉職の處今回第二次勤務演習のため見習醫官として歩兵第三十八聯隊（伏見）に入隊せらる。

●竹重信次氏（大正三）　本校細菌學及病理學教室に研究中の處長野赤十字社支部病院の聘に應じ内科醫員として就任せらる。

●高桑勇次郎氏（明治三九）　軍醫を辭し下平博士の下に研究生たりしが今回金澤病院外科醫員として奉職せらる。

●藏光教授　曩きに婦人科及産科學研究のため米國に留學を命ぜられしが愈去月三日金澤出發、仝月八日午後三時サイベリヤ丸にて横濱出帆渡米の途に上られたり。切に海陸無事到着せられんことを祈る。

●大井逸雄氏（大正四）　豫て金澤病院内科第二部にて研究中の處今回

神奈川縣三浦郡浦賀町ドック會社々醫として就任せらる。

●永山昇一氏（大正元）　東京額田病院を辭し、東京市外巣鴨宮仲二二六六、巣鴨醫院假診療所に於て開業せらる。

●土肥教授　本月一日より東京に於て開催の日本皮膚科學會に列席のため上京せらる。

●森田隼三氏（皮膚科醫員）　仝上

●織田他家男氏（婦人科醫員）　四月一日より京都に於て開催の日本婦人科學會に列席。

●田村教授　本月一日より東京に於て開催の日本內科學會に列席のため上京。

●近藤清吾氏（內科二部醫員）　仝上

●塩村和喜男氏（內科二部醫員）　仝上

●松原教授　仝東京に於ける神經學會に列席のため上京。

●淺井貞準氏（內科一部醫員）　仝上日本內科學會。

●下平教授　仝上日本外科學會に列席のため去月卅日上京せらる。

●田中一次郎氏（外科醫員）　仝上

●林教授　仝上東京に於て開催の日本小兒科學會に列席のため上京。

●須藤教授　本月三日より東京に於て開催の日本病理學會に宿題講演のため上京せらる。

●中村教授　仝上病理學會及山極博士在職廿五年祝賀式に參列のため上京。

●兒玉教授　四月一日より東京に於ける日本衛生學會に列席のため上京。

●高安校長　仝名古屋市に於て開催の日本眼科學會に列席のため出張せらる。

●今井亥三松氏（甲醫）　廣島市に於て開業し大に隆盛を極められしが去る二月病死せられし由謹で弔意を表す。

●牛塚榮太郎氏（明治三七）　卒業後直に金澤市小立野上石引町に於て開業せられしが性溫容情謹に富み而も勤勉、努力、爲に門前常に市をなすの盛況を極め既に診察所及病室の新築を終り益々業務擴張の抱負を有せられしが去月一日俄然病死の凶報に接す、惜むべしといふべし謹て哀悼の意を表す。

會告

左記ハ本校記念館設備品トシテ寄贈セラレシ芳名ナリ。（寄贈順）

一芝蘭堂新元會圖掛物　壹軸　理事下平用彩殿
一蒼盤　貳面　價格金七圓六拾錢　三得會
一碁石　貳組　價格金六圓四拾錢　仝
一碁桶　貳組　價格金七拾錢　仝
一將棊盤　貳面　價格金壹圓九拾錢　仝
一彫駒　貳組　價格金四拾錢　仝
一掛時計　壹個　價格金七圓五拾錢　仝
一鞍掛　壹個　價格金七圓五拾錢　仝
一花瓶　壹個　價格金四圓五拾錢　仝
一電話機裝置（室內）壹式　價格金七拾貳圓七拾壹錢　仝
一座蒲團　八拾枚　價格金九拾貳圓　仝
一電燈裝置（外燈）壹式　價格金拾七圓九錢　仝
一歌加留多　貳組　價格金壹圓貳拾錢　仝
一鐵製火鉢　拾五個　價格金貳拾四圓五拾錢　仝
一鐵製火鉢　五個　價格金七圓也　別所吉太郎殿

以上